

---

# 【Unilaterally Electron Child】

紗柚

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【Unilaterally Electron Child】

### 【コード】

N6629L

### 【作者名】

紗柚

### 【あらすじ】

御坂 美琴の前に現れた一人のクローン。クローンと出会い物語は、如何なるのだろうか…。名前不明。能力不明の主人公が紡ぐ物語。科学と魔術が交差するとき、物語は始まる。はず…。(汗)  
(主人公最強物の予定。とある科学の超電磁砲をメインに書いてるはずですが、どうなるかは作者には分かりません。とある魔術の禁書目録がメインになるかもしれません。作者の処女作です。自由気侷に書きますので暖かく見守って下さい。よろしくお願いします。)

## プロローグ

学園都市内 某研究所

「んじゃ、今後のために説明しとくわね」

「よろしく願います」

…コポツ…声…？

「これが実験体として適した状態まで成長させたヤツ。受精卵から十四日間でこうなるわ」

…誰…？

ピッ

プシュー

「うわー。本物の人間みたいですね」

「そりゃそうよ。そういう風に造られた複製だもの」

…フルフル

ふあ〜あ

「でも見ての通り、この状態じゃ精神年齢は新生児並。言葉も理解でき」…ここ…何処？』ない。…？あら？」

…クシヤ…ガシガシ

「…何してるの？」

「いや、このままじゃカゼひいちゃうかなと」

「イチイチそんな事やってらんないわよ。私達は命令通りに進めるだけよ」

第一話 八月十五日？

公園内

……タツ……タツ……タツタツ

誰かが公園内に駆け込んで来た。

木を見上げていた僕が振り返ると……

そこには一人の少女が……

「あなた……何者？」

その少女は私の姉だった……。

御坂美琴……私のオリジナル……。

そして私は……御坂美琴のクローンであり……不良品……御坂……名前まだない……。

それに姉と私の違いは髪の長さで性別だけです。

「え？……弟？子供？」

私……いえ、僕の返答に啞然とする……お姉様？いえママとも呼べば良いのでしょうか？

「……アンタ私の……ク、クローンなわけ？」

「はい。正確にはお姉様と一方通行の遺伝子を元に作られたハイブリットです？」

「なんで疑問系なのよ！！例の計画とやらは凍結したはずでしょ？何でアンタみたいなのが存在するのよ！」

あえてお母様ともお呼びしましょう。

お母様は僕からの情報で混乱しているようです。

「僕はお母様の遺伝子と一方通行の遺伝子を配合するとどうなるか？という、一部の科学者の実験により生まれてきました……まあ、そこから逃げ出してきた訳ですが……」

「……お母様ってあなたねえ……。で、どこのどいつが計画を主導してるの？」

「……機密事項です」

ニヤツ。

僕はお母様をイラつかせてみることにします。

「遺伝子配合は分かったけど他に何のために作られたわけ？」

「…禁則事項です（笑）」

僕の答えにお母様は堪忍袋がキレたようです。

僕の腕を掴み僕は拘束されました。

「ガァー！（笑）って何よ！アンタ痛い目にあいたいの？力づくで聞いたっていいのよ！」

電流でも流されるのでしょうか？

「くっ…」

暫く、お母様を見つめっていると拘束を解かれました。

「いいわ、行きなさい。勝手に後を尾けさせてもらうから、アンタはどっかの施設なり研究所なりに帰るわけだから、そこでアンタの製造者をとっ捕まえて直接聞き出してやるわ」

…お母様は僕の言葉を聞いてなかったのでしょうか？

逃げ出してきたと言ったはずですが…まあいいです。

今日実験があつたはずですし乱入させて頂きましょう。

それまで外を自由に回ることになります。

歩いていると猫を発見しました。

和みます。

後ろでお母様が何か…

「聞けよっ」

「ぐえっ」

「\$£#£¢…」

…お母様、痛いです。

そしてお話し長いです。

ゲッソリ…

通りかかったオジサンにアイスというものを頂きました。

ふむ。

これは美味しいですね。あとオジサン僕達は姉妹ではないです。

親子です。

「お母様、身体が冷えたので温かい紅茶が飲みたいところです」

「ふざけるなっっ!」

…といいもご馳走してくれるお母様、大好きです。

「…でアンタいつんなったら帰るのよ…?」

「言い忘れてましたが、僕はこれから実験に向かうので施設へは戻りません。それにこれは先程も言いましたが施設から逃げ出してきたので帰りません」

「は?」

「お母様が後を尾けるのは自由ですが、僕の製造者には会えません」

「なっ…何で今頃…」

「聞かれませんでしたので」

「っ……………」

…お母様、案外馬鹿なのでしょうか?

「もういいわ。今日のところは失礼させてもらうから。…ん、まだ何かあるの?」

ふむ。

能力だけ分けてもらいましょう。

「お母様の電気を分けて欲しいです」

「は?なんでそんなことを…」

といいつつ分けてくれるお母様、大好きです。

まあ、分けるというか吸収したのですが…。

「ありがとうございます。さようなら。お母様」

「ああ、うん。じゃあね」

さてお母様は行ったようですので実験に乱入しましょうか…。

今、僕の目の前には一方通行がいます。

僕は生きて帰れるのでしょうか…。

「現在時刻は二十時四十八分です。実験開始まであと十一分四十秒です。指定のポイントへの移動をお願いします」

「二十一時零分になりました。これより実験を開始します」  
カーンカーンカーン

【『「妹達」を運用した絶対能力者への進化法』

学園都市には七人の超能力者が存在するが、

『樹形図の設計者』の予測演算の結果。

まだ見ぬ絶対能力へ辿り着ける者は、

一名のみと判明した。

この被験者に通常の『時間割り』を施した場合。

絶対能力に到達するには二百五十年もの歳月を要する。

我々はこの『二百五十年法』を保留とし、

実戦による能力の成長促進を検討した。

特定の戦場を用意し、シナリオ通りに戦闘を進める事で成長の方向性を操作する。

予測演算の結果。

百二十八種類の戦場を用意し -

『超電磁砲』を百二十八回殺害する事で絶対能力に進化すると判明した。

しかし『超電磁砲』を複数確保するのは不可能であるため、

過去に凍結された『量産型能力者計画』の『妹達』を流用してこれに代える事とする。

武装した『妹達』を大量に投入する事で性能差を埋める事とし、

二万体の『妹達』と戦闘シナリオをもって絶対能力者への進化を達成する。

補足……。

……もう一名、絶対能力に辿り着ける存在が……】

一方通行、中々速いですね。  
だんっ

? 何故一方通行は壁を叩いたのでしょうか……?

どん

ガン

「？」

この音は?

ゴン

ガアアン

! 上ですか!?

ドガシヤ！

「…ッ！」

突然、僕の上にエアコンの外付け？というのでしょうか……、いきなりこんな物が落ちてくるとは思いませんでした……。でも当たりませんよ。

僕は間一髪で避ける事に成功しました。

ですが、一方通行がいません。

上に視線を向けると……、体重を乗せて踏み潰そうとする一方通行の姿がありました。

危ないです。

下手したら、今顔踏まれてました。

一方通行は何処に消えたのでしょうか……？

ハッ！また上ですか！？

案の定、上を見上げると何かをしようとする一方通行が視界に移りました。

これはマズいです。

ここは停電させて頂く事にしましょう。

そして、暗闇から鉛玉のプレゼントです！

パチッ

スッ

フッ

暗闇に紛れて僕は銃を構えます。

喰らいなさい！一方通行ッ！

命中確認しました…ッ！

ドッ！

ズルル…

「ぐっ…。……何が？」

理解不能です。

今何が起こったのでしょうか…。

弾丸は一方通行に命中したはずでは…？

何故、僕が傷を負い倒れているのでしょうか…？

くっ…今ので一方通行に発見されました。

予定位置に逃走します。

僕は逃げ回り、階段に辿り着きました。

カンカンカン

階段が…ハア…ハア…。

カンカンカン

ハア…ハア…長いです…。

「はっはア。逃げる逃げる。その分だけ長生きできっからよオ。こ

いつは命がけの追いかけっこだからなア」

一方通行の音が頭に響きます…。

ですが、長い階段も終わりました。

予定位置にはもうすぐつくはずです。

ヒュッ……ダアアンツ！！

なっ！

橋から飛び降りてくるなんてツ…。

どうしてでしょうか。

橋から飛び降りた一方通行には傷一つありません。

「追いつかれたらゲームオーバーだぜエ」

チッ！

もうすぐ予定位置だというのに…。

仕方ありません。

大回りで予定位置に向かう事にします。

「遅っせエ！！」

ズンツ！

なっ！

あり得ません。

一方通行が足を踏み鳴らしたただけだというのに、石が飛んでくるなんて…。

ドゴオオ！

「あッ…がッ…」

「そろそろア。寝っ転がってるヒマなンざねエぞオイ。はっはアッ！」

ドゴオオ！

ドッ！ドスン！

ぐっ…。

一体何が起こっているのでしょうか…。

「オイオイ。何だ？もう壊れちまったのかア。こんなんで本当に絶対能力者になれンのかね」

とにかく…目標地点に急がなくては…。

…絶対…一方通行に一泡吹かせてみせます。

「いいねエ。シブといじゃねーか」

ミシイ

ドサア！

ハア…ハア…ゴブツ…

予定位置に…到着…しました。

「どーしたどーしたア。そろそろへバツちまったかア？それとも諦めちまったのかなア」

「僕は…目標の能力を正確には把握できていません。…が、これまでの実験結果から能力の応用で周囲に反射を展開していると推測します。目標が地に足をつけて歩行している事から下方…少なくとも足裏には能力は展開されていないと思われるため、足裏からの奇襲が最も有効であると結論づけれます」

「何、ブツブツ言ってるんだ？逃げねエなら終わりにすンぞ」

そのまま近づいて来なさい。

一方通行ッ！

「…逃亡ではありません。計画通り目的地への誘導を達成した。と訂正を求めましょう」

今です！

パチッ

パリパリ

ピッ

カッ

ドツゴオオオオ!

「目標：完全に沈黙……?」

先程まで一方通行がいた場所に煙が立ち込めています。

さすがの一方通行でも足裏からの爆発なら吹き飛んだでしょうか…?

ドシヤア!

「あうッ」

「ざアーンねンっ!! テメエの考えはてンでの外れなんだよオ」

一方通行が煙の中から出てくるのを、僕は視界の隅に捉えました。

まさか、あの爆発で生きているなんて!?

これが一方通行：学園都市最強の超能力者…ですか…。

一方通行に捕まった僕は地面に倒されてしまいました。

そのまま、一方通行は僕の足を力強く握り締めてきました。

直接足を潰しにきましたか…ですがそれはさせません。

一方通行、アナタの能力を吸収させて頂きます。

足を潰されるのは防げました。

しかし、僕もそろそろ限界です…。

身体がもう…。

「チっ、テメエ今何しやがったア。まあいい。流石に追いかけてっ  
できなくなっちゃったなア。このままほっといてもくたばンだろオ  
が、ジッと待ってンのもたリイからよオ。」

それにしても、これがお父様ですか…。

僕は限界近い身体を動かして逃走を図ります。

ズルル…

ズリ…

ズズ…

ズ…

でも…

「ああー？よオ。まだ逃げんのかよ。つってもそつちは行き止まりだぜ。それともまだなんか奥の手でもあんのかよ」  
ズルル

このままでは……

ズズ……

終われません……。

ヒュウ……ヒュー

「……。もオいいや、オマエ。終わりにしてやんよ  
一方通行は何をする気なのでしょうか？  
列車に向かって行きました。

今の内に反撃の演算をしましょうか。

「！？うそ、うそつ。そんな……。やめつ……！」  
ん……？

何処からお母様の声が聞こえました……。

それに、僕の上に何か大きな物があるような……。

ドゴツシャアア！！

「本日の実験しゅーりよオー。結構、ハデに暴れちまったがアイツらで片づけられんのかねエ。帰りにコンビニでも寄って……」

ガガガガガガガガツ

突如として一方通行に降りかかる電撃の嵐。

「！！！？」

「あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ」

一方通行は驚き、電撃が飛んできた方向を振り向けば……、そこには怒り狂い自分に突撃してくる超電磁砲の姿が……。

第一話 八月十五日？（後書き）

文章改訂ついでにまとめてみました。

感想頂けると嬉しいです。

漫画メインで書いていますので、次の投稿は6月26日以降になる  
と思います。

**第二話 八月十五日？（前書き）**

主人公の名前募集中です。

今回主人公全く出てきません（汗

## 第二話 八月十五日？

- 学園都市内 -

「お姉様は…もしご自分のクローンが目の前に現れたらどうなさいますか？」

「ん…、そ…ねえ。やっぱり薄っ気味悪くて、私の目の前から消えてくれーって思っちゃうわね」

ギイン

ザザザザザザザザザ

「おおっ」

学園都市 第三位 『超電磁砲』の御坂 美琴は、己の能力を用いて周りにある砂鉄を集める。

「スゲエスゲエ。何だ新ワザかア？」

ゴッ

ドオッ

ゴオオオオザアアアア

砂鉄の竜巻を作り上げ、一方通行を閉じ込める。

「ふーん。磁力で砂鉄を操ってるのか。おもしれー使い方だ」

ピッ

ゴアッ

「タネが割れたらどーってことねエがな」

しかし、一方通行には通用しない。

己の能力を行使し、砂鉄の竜巻を吹き飛ばす。

『そんなっアレを食らって傷ひとつ負ってない!?!』

ミシ

ビキ

ビキ

ビキ

バギ

だが、砂鉄だけでは終わらない。

今度は線路のレールを磁力で集める。

「……………?このパワー。オマエ……………」

集めたレールを一方通行に向けて発射する。

ガガガガガガガガ

ガスッ

ガスッ

ガスッ

ガスッ

ガスッ

ガスッ

レールが一方通行に飛来する。

ギョオツ

イイイイイイ

ガアアン

「っ……………」

ガッ

ドス

ドス

『何が……………』

一方通行に向けて放ったはずのレールが、突如として美琴に飛来した。

咄嗟に避けることには成功したが、美琴は何が起こったのか理解出来ない。

美琴の攻撃は確かに直撃したはずであったのだから。

『私の攻撃をあしらえる能力者なんてあのバカ以外には……』

「そうかそうか、予定と違うから何かと思っただら……、オマエ、オリジナルかア」

ゾクウツ

一方通行の言葉に、美琴は背筋に悪寒が走った。

「クローン共はオリジナルの代わり……てこたアだ。オマエと戦れば、このダリイ作業もグツと短縮できるだろオ？イイ加減飽き飽きしてんだ。頼むぜエ、オリジナル」

一歩、一歩と歩んでいた一方通行が不意に止まる。

何故なら、美琴がコインを手に持ち、構えていたからだ。

「何で……、何でこんな計画に加担したの……？」

「あア？何だイキナリ」

「答えて！それだけの力があつて……無理矢理やらされてる訳じゃないんでしょ。こんなイカした計画に協力する理由は何！？あの子に恨みでもあつたわけ？」

「理由？理由ねエ、そりゃあ、絶対的なチカラを手にするため。最強だとか、学園都市で一位だとか、そんなつまねエモンじゃねえ。俺に挑もうと思つ事すら許さねえ程の絶対的なチカラ『無敵』が欲しいんだよ。オマエも超能力者なら分かるだろ？」

「何よ……それ……、ゼツタイテキなチカラ？ムテキ？そんな……、そんな事でつ、アンタはつ、そんなツ、そんなモノのためにあの子を殺したのかーッ！！！！」

ガアアン

一方通行の言葉により、怒りに震えた美琴は、一方通行に向けて、ついに超電磁砲を放った。

しかし、超電磁砲も一方通行の反射によって、自身の後ろに立つレールに当たっただけであった。

「人聞き悪いな、人殺しみてえに言うなよ。俺が相手してんのはポタンひとつで造れる模造品だぜ。？何固まってんだよ。ああ、そう

か。悪い悪い、今のオマエのとおきつてヤツだったんだな。仮にも同じ超能力者だ。クク…、まさかこんなシケたモンだと思わなくてよオ。さて…次はこっちの番だ。そのザマじゃあんま期待はできねえが、ちったあ楽しませてくれよな三下ア」

「お待ち下さい」

しかし、一方通行の番は存在しなかった。

二人しか居なかった空間に、第三者の声が聞こえたからだ。

「計画外の戦闘は、予測演算に誤差を生じるおそれがあります。と、ミサカは警告します」

第三者の言葉の中に、ミサカという言葉が聞こえ、美琴は、はっ、と振り返る。

そこには、大勢のクローンの姿が…。

「特にお姉さまは超能力者ですので」

「戦闘により生じる歪みは」

「非常に大きく」

「期間の短縮はおるか」

「計画が破綻するおそれがあります」

「またミサカには、今後予定されている実験に合わせた」

「チューニングが」

「施されており」

「計画を途中で変更する事は、極めて困難であるとミサカは説得します」

一人、また一人と別のクローンの言葉に別のクローンが言葉を続ける。

「チツ、分かった。分かった。分かりましたよ。ちょっとからかっただけだったの。リレーしてしゃべんな気持ち悪い。……ハッ、そーいやア自己紹介がまだだったな。オマエのクローンにや世話ンなつてンぜ。俺の『無敵』化を手伝ってくれてンだ、感謝しなきやな」

一歩、また一歩と近づいてくる

【最強に飽き足らず、さらにその上を目指す超能力者…、まちがいないこの男は…】

あらゆるベクトルを操る学園都市の第一位】

「『一方通行』だ。ヨロシク」

それだけ言つと、一方通行は帰って行つた。

「九九九五号から一零零零七号まではレールの撤去を」

「一零零零八号以降は…」

かくんっ

一方通行との戦闘からの緊張が途切れたのか、美琴はその場にへたり込む。

「…アンタ達…、何なの…？おかしいよ…。何でこんな計画に付き合ってるの？殺されちゃうのよ？こんなのワケ分かんない……………。何だよ！！生きてるんでしょ！？命があるんでしょ！？アンタ達にも…あの子にもツ、こんなの…、これじゃ一体何の為に……………」

「ミサカは計画の為に造られた模造品です。作り物の体に借り物の心、単価にして一八万円の実験動物ですから」

美琴は、クローンの言葉に絶望した。

ドオオン

突然、一方通行が実験中に列車でクローンを潰した場所から爆発音が聞こえた。

何事かと、美琴が振り返ると、そこには自分を母と呼ぶクローンの姿が…。

「生きて…………… たんだ……………」

ここで美琴は意識を失った。

## 第二話 八月十五日？（後書き）

感想頂けると喜びます。

不定期更新ですがこれからもよろしくお願いします。

第三話 八月十六日（前書き）

主人公の名前まだまだ募集中です。  
よろしく願います。

### 第三話 八月十六日

「君のDNAマップを提供してもらえないだろうか？」

「ダメよ！DNAマップは筋ジストロフィーの治療になんか使われないっ、それを元にクローンが造られちゃうの！あのイカレた実験が始まっちゃうの。だから……」

「……うんっ」

「待って！聞いてよっ。お願いだから話を……。！？」

「なるほど、お姉さまが原因だったんですね。ミサカが造られたのも……、ミサカが殺されるのも……、全部……」

「う……」

（そっか……、あのまま朝まで）

「久しぶりね」

美琴はどうやらベンチの上で寝てしまっていたようだ。

声が聞こえてきたので、座っていた美琴が顔をあげると、其処には、長店上機学園 布束砥信がいた。

「ベンチで夜明かしている不良少女がいると思えば……、regrettable計画を知ってしまったようね。あなたには止める術

などないのだから、関わるなと言ったのに」

「言われてない」

「Oh dear? そうだったかしら」

「……何で、何であんな事ができるの……？ 絶対能力だか何だか知らないけど、大勢の人を殺してまで手に入れたいものなの？ あの実験に関わってる人間、皆イカレてるわ」

現実の絶望感を味わった美琴は、足を抱え込んでいた腕に力を籠める。

「少し……違うのよね。どこかイカレてるっていうのは否定しないけど、理非善悪を言っているのなら話が変わるわ。例えば、ガンを完治する治療薬の開発のメドが立ったとして、それにモルモット二万匹の実験データが必要だとしたら、あなた……今仕方ない事だと思っただけでしょう？」

「……屁理屈よ」

「同じ命なのに？ 少なくとも彼ら研究者にとっては同じ事なの、絶対能力に至る為に人工的に製造されたモルモット。もちろん私利私欲でやっている者もいるし、本当にネジが外れている者もいるわ。

でも、彼ら研究者には殺人を犯しているという認識はないの。私もそうだったから……」

人間は本当に身勝手な生き物である。

他の生き物は自身が生きる為に、他の生き物を殺す。

しかし、人間は生きる為だけでなく、己の欲求のままに殺すこともあるのだから……。

「アンタがマネーカードをバラ撒いてたのは、実験を妨害する為だったんでしょ？」

「そうね」

「計画に加担してたのに何で……？ 人間じゃない……、造り物を守る為に何でそんな……」

「前の計画が凍結されて、私は一度チームを外れたわ。でも『妹達』が『絶対能力進化』計画に引き継がれた際に再度呼び戻されたの」

そう言つと、砥信は昔を思い浮かべる。

出口へ向かう昇降機には、二人の女の子が乗っていた。

「屋内実験が開始されても、個々の個体の精神に特段の問題無し。

『ミサカネット』の方も…、異常は無いようね。外部研修に出るに当たって聞いておきたい事はあるかしら？」

この時の問いは問題点はあるか？

ということだったのだろう。

しかし、予想外の返答が返ってきた。

「外の空気は甘いのでしょうか。辛いのでしょうか」

「？」

「外部の空気はおいしいと教わりました。ミサカは甘い方が好みなのですが、とミサカは自身の好みを吐露します」

と、ミサカは外に出れる為か、そわそわして落ちつかない。

「…まあ、実際に出てみれば分かるわよ。今日は日射しがきついわね…」やがて、昇降機が出口に着き、二人は歩いて青空の元へと向かう。

「失望させちゃったかしら？」

「…いえ、そんな事はありません。様々な香りが鼻腔を刺激し胸を満たします。一様でない風が髪をなぶり、身体を吹き抜けていきます。太陽光線が肌に降り注ぎ、頬が熱を持つのが感じられます。世界とは…こんなにも、まぶしいものだったのですね」

「我ながら単純だと思っけど、あの時から私は彼女達を造り物とは思えなくなつた。世界が歪んだ醜いものしか見えていなかった私よりも、彼女の方がずっと人間らしいと思つたから………。あなたは……、彼女達をどう見るの？」

「私は……クローンを人間としてなんて見れないし、殺される事を受け入れている連中を助けようなんて思えない。でも、ひとのDNAマップをくだらない実験に使うヤツらを見過ごす気もないわ」美琴は決意し、ベンチから立ち上がった。

「私が撒いた種だもの。自分の手で片をつけるわ」

「素直じゃないわね。計画の関連施設は二十を超えるわよ。ひとりでやるつもり？」

「私を誰だと思つてるの？」

砥信にそう言つと、美琴は片をつける為に行動するのだつた。

美琴が去つた後、砥信に近づく影があつた。

「大丈夫です。お母様は僕がサポートします」

「任せるわ」

美琴は一人の子供がついてきている事を知らない。

第四話 八月十九日？（前書き）

…主人公空気？

#### 第四話 八月十九日？

ここ数日、昼夜ぶつ通して研究所を潰し回っていた美琴は、寮の部屋のベットで倒れていた。

（ダメ…よ。今この瞬間も実験は行われているかもしれないんだから…）「ハア…ハア…。一刻も早く全て…を…」

疲労の溜まっている身体を起こそうとしていると、  
コッコツ

カチャ

自室の扉が開けられた。

「あ！お姉様、帰ってらっしゃったのですね」  
扉を開いたのは、同室の白井 黒子であった。

「何よ黒子。私が自分の部屋にいちや悪いつての？」

扉が完全に開く前に、美琴はどうか身体を起こし、何事もなかった様に振る舞った。

「いえいえ、ここ数日、昼も夜もほとんど戻られなかったの…」

「はは、ちよつと野暮用でねー。またちよつと出てくるわね」

美琴はまた研究所を潰す為に動き出そうと、部屋を出ようとする。

「ちよ…ちよつとお姉様？野暮用って一体何なんですの！？寮監の抜き打ち検査でもあったら…」

「その時は、上手くごまかしといてちようだい」

「お姉っ…」

ボタン

美琴は部屋を飛び出していった。

「何か大変な事を抱え込んでおられるのは一目瞭然ですのに…。黒子では、頼っていただけませんか…」

- 夜、某研究所内 -

残り二基の研究所、その片方に美琴の姿があった。

物陰に隠れ、見張りがいない時は大胆に一直線で走る。

見張りがいる時は死角を移動したり、時には待ち伏せて気絶させたりしながら進んでいった。

シユォ

ゴツ

そんな中、天井が突如崩れてきた。

ズンツ

ドドドドドドドド

ガンツ

「やっぱりそんなに甘くない…か」

しかし美琴は、能力で瓦礫を全て逸らす。

シユゴオオオオオ

美琴の足元の導火線に火花が通るが、それも回避してみせる。

ドオオン

しかし、導火線は近くのぬいぐるみに繋がっており、ぬいぐるみは爆発した。

ぬいぐるみには爆弾が仕掛けられているようである。

美琴が辺りを見回すと、あちこちにぬいぐるみが見掛けられていた。先程の爆発によってか、ぬいぐるみに繋がっている導火線に火花が走る。

美琴は転がっている瓦礫を磁力によって盾にしようとしますが…、

（予め部屋に仕込んだ導火線を使って発火してるのか。でも何を考  
えてこんなこれ見よがしな……）

コチッ

盾にしようとした瓦礫の中に時限式の爆弾が…。カチッ

ビュッ

ボン

美琴は冷静に瓦礫と反発させ回避する。

「くッ、くそッ」

けれども、回避した場所には火花の近いぬいぐるみばかり、美琴は  
慌てて壁に吸着しようと速度を上げる。

ドドドドオ

だあん

美琴が壁にぶつかる前に、壁と美琴の間に入る人影がいた。

「ッ〜〜」

「！？あ、あんたどうしてここに！？」

「僕はお母様を守る為に来たのですが、少し遅かったようです」

その人物は、美琴を母と呼ぶ美琴と一方通行を組み合わせたクロー  
ンであった。

便宜上、このクローンをミサカと呼ぶ事にする。

「そう、助かったわ」

（それより相手は？導火線を辿った先にいるはず…）  
視線を巡らせると階段の途中に人影がいた。

バシユッ

「おっと」

美琴は咄嗟に電撃を放つが、人影は鉄骨を盾に階段を昇る。

「チッ」

（鉄骨が邪魔で当たらない。後々ちよっかい出されても面倒だし、  
先に片付ける！！）

「待って！」

美琴は階段に向かって走り出す。

ミサカは美琴を守る為、美琴の後を追う。

美琴が角を曲がった時に、死角に仕掛けられていたぬいぐるみが爆発し破片が飛来するが、電撃で吹き飛ばす。

ようやく階段にたどり着き、美琴は階段を駆け上がる。

ミサカも美琴の後ろにぴつたりと付いてきていた。

「うわ、すっごい形相。捕まったら八つ裂きにされちゃうかも、なーんちゃって（ハート）」

ガパ

階段が突如崩れる。

ガアン

ガガガガガガアンツ

「にししし この高さでも打ち所が悪ければ…、あれ……？」

「私達を落としたいなら、鉄分を抜いて施設ごと建て直しくべきだったわね」

美琴とミサカは磁力によって階段の瓦礫を繋げ落ちるのを防ぐ。

「何それ、ズルう。しかも増えてるう」

バシ

バシイ

「わわっ」

またも電撃を飛ばすが、今度は手すりに阻まれる。

謎の女は近くの部屋に逃げ込むが、すぐに美琴達も追いかけて、部屋に入る。

「袋小路ね…。単に慌てていて判断を誤まったのかしら？それとも…」

「気を付けて、お母様。罠かも…」

「結局ここまで追いこまれるとは思わなかったわ」

第四話 八月十九日？（後書き）

感想・主人公の名前をお待ちしています。

**第五話 八月十九日？（前書き）**

今作者は調子が良いようです。  
でも…主人公は空気？

## 第五話 八月十九日？

「今の内に聞いておきたいんだけど、アンタ達を雇ったのは誰かしら？」

「！」

「義理立てとか考えない方がいいわよ。この施設はイカレた実験の……」

「あー、いーからそーいうのお。雇い主の目的とか、消す相手が善人とか悪人とか、そいつが歩んできた人生とか、結局んなもんはどーでもいい訳よ」

そう言つて、謎の女は笑う。

「それと私を追い込んだつもりみたいだけどー」

ボンツ

ガララララ

ズン

やはり畏だつたようです。

僕とお母様が入ってきた入り口は、爆弾の爆発により塞がれました。「結局っ、追い詰めた方が追い詰められてたつてのは、よくある話な訳よ！！まわりをよく見てみなさいっ」

謎の女の言う通りに辺りを見ると、そこらかしこに導火線がありま

す。

バシユ

バラララ

そして頭上のダクトからはぬいぐるみがたくさん落ちて来ました。

「退路はふさがれ、身を守る盾も無し！！」

シユバツ

謎の女は導火線の発火元でしょうか？

その様な物をスカートの中？から取り出しました。

「しゃきくん。この窮地、凌げるものなら凌いでみなさいッ！！」

シユ

ボ

ボ

ボ

ボ

そう言うと、謎の女は発火元を導火線に投げました。

「はー…、まずったわ。話し合いなんて考えるからこうなんのよ。

少しでも体力を節約しないといけないのに…。こんな事に余計な力

を使うなんて」

ガァンツ

ブシユツ

ブシユ

ブシユツ

流石お母様です。

磁力で床を持ち上げ、導火線を断ち切りました。

「アンタは其処で見えていなさい。さて、覚悟はいいかしら」

今度はお母様の番の様ですが、僕はお母様に言われた通り、お母様

戦いを見守る事にします。

と、謎の女はスカートの中から何か落としました。

「お母様！危険です！！」

カッ

「しまっ…」

僕は危険な物だと判断し、お母様に叫びますが遅かったようです。落とされた物はスタングレネードだった様で、耳と眼を潰されました。

「自信満々の能力者を嵌めたこの瞬間が最っ高ーに快感な訳よ！」  
プシュ

音など一切聞こえませんが、電磁波によって何かが飛んでくるのが分かります。

お母様も気付いていると思うので、とりあえず天井辺りに避難します。

ドウッ

ドドドドドドドド

飛んで来た何かが爆発したようでぬいぐるみも一緒に爆発しまみたいですね。

「にひ（ハート）にゃーはっはっは。ま、結局、私にかかればこんなもんな訳よ！よっしゃー、ギアラ半分ゲットオ（ハート）何買おっかなオ〜〜」

ようやく耳と眼が回復しました。

下を見ると謎の女が小躍りしてます。

…これは攻撃しても良いのでしょうか？

「発電能力者についてよく調べてるみたいだけど」

「ひっ」

「私くらいになると電磁波で空間把握ができるのよ。で、壁と天井に貼り付いて回り込んだと、おっと、下手に動かない方がいいわよ。この距離なら何しても電撃の方が早い…」

（薄暗くてよく見えなかつたけど、外人？）

「M i j i c a v i n o c a p r i c i r e v a s g i c  
h o v i r e S g i c a c c i s l a n o h a p p a f u  
m i f u m i ? ! !」

「「？」「」

…あの女は何を言っているのでしょうか？  
理解不能です。

「こんな言語ねえっつの！！」

謎の女が何か投げつけてきましたがお母様がすぐに迎撃します。

ドン

！？

小瓶の様な物だったはずですが、爆発が大きいです。

しゅー

シューウ

ダクトから煙が出てきました。

危険と判断し、天井から降りることにします。

「学園都市特製の気体爆薬『イグニス』この気体は人体には害が無  
いけど、放出後、一瞬で拡散して空間を満たす。要するに、今やこ  
の部屋自体が巨大な爆弾って訳よ」

シューー

「香水瓶程度のサイズでさっきのあの威力。電気なんか出したらど  
うなるか……」

「ッ……」

謎の女の言葉を信用すると、この気体は僕達にとって天敵のよう  
です。

ガッ

謎の女が蹴りを放ちましたが、お母様はガードしたので大丈夫でし  
ょう。

この状況はお母様には不利です。

お母様を援護しなくては。

「お母様！援護します」

「！」

ビュオッ

グッ

ブン

「ぐあッ」

もう一度蹴りが飛び、お母様は体勢を崩してしまいました。

謎の女はお母様の髪を掴み、投げ飛ばしやがりました。

「ぐ……、ッ！！」

謎の女はお母様を踏み潰そうとしやがります。

お母様は回避したようですが、先程から僕の中で何か変化が起きているようです。

「自殺志願者を見るような顔ね。こっちは暗部で長い事仕事してんよ。死ぬのが怖くてやってられるかっての……、よっ！！」

謎の女はまたもや、お母様に蹴りを放とうとしているので、僕は謎の女とお母様の間に入って蹴りを受け止めようとしたんですが、踏ん張れずにお母様共々吹き飛ばされました…。

「がっ」

「かはっ」

「クク……」

（なーんちゃって、んなワケないっての。最初に投げつけたのは本物の爆薬。でもその後、撒いたのはただの窒素ガスよ。どんなに暴れても爆発なんか起きないのよねー。引火の警戒と、とっさに能力を使う癖を抑えるのに精一杯でしょ？得意の能力を封じられた気分はどうよ）

その後も能力を使う癖を抑える時に出る隙を突かれ、僕とお母様はほぼ一方的にやられています。

そして、僕の中では変化が徐々に大きくなってきました。

「結構頑張るじゃない。もうちょっと遊びたかったけど、麦野達に来るまでに終わらせなきゃね」

ジャキ

謎の女は靴に仕込んだナイフを出しました。

「さつき標的の人生なんてどーでもいいって言ったけど、止めを刺す時だけはちよつと感慨深いものがあるわね。命を摘む、まさにその瞬間、私は相手の運命を支配した気分になれるの。結局、コイツは私に殺される為に生まれてきたんだ、ってね（ハート）それじゃ、最期にイイ感じの悲鳴を聞かせて…、ちよーだいッ」

お母様に止めを刺す為に蹴りが放たれる。

だが、お母様は腕を使って謎の女の蹴りを止める。

「殺される為に生まれてきた？そんなクソつたれな運命を逃げもせず、抗いもせず、助けすら求めないで、当たり前のように受け入れて…、ツざけんじやないわよ！！！」

お母様は腕に力を入れて蹴りを弾き飛ばす。

「ぐぎッ、がつ、はッ、ぬ、ぐうう、ぬおっしやあッ！」

そして謎の女が体勢を崩した所を後ろから絞めました。

ですが、謎の女は力押しでお母様を投げ飛ばしやがります。

「ぐッ」

「はっ、悪くない考えだったけど、ケホ、結局は素人！完全にはっ…、ゲホゲホ、訳よ…ね…？」謎の女が無理矢理投げ飛ばした時に、出てきた数個の発火元の一つが導火線の上に落ちようとしています。このままでは爆発します！！

チッ

「によわッ！！？」

ボシユッ

「……………」

…………爆発は起きませんでした。

…………あの女に嵌められた訳ですか。

お母様も怒っているようです。

「てててて…、あつぶねー、あぶねー。危うく自分の體で下半身ぶっ飛ばすところだったわ。まったく自慢の脚線美だったのに…、あ」

「あ…、そっかそっか、そーいう事か、なるほどねー。結局、私も随分初歩的なハツタリに引っかけた訳かー。はは…、結局だっ

て、感染っちゃったかしら。あははははははは「

「は…、ははは…、てへっ」

バリバリバリ

「ぎゃんっ」

…お母様の怒りが爆発したようです。

**第五話 八月十九日？（後書き）**

感想・主人公の名前をお待ちしています。  
特に主人公の名前を頂けると喜びます。

第六話 八月十九日？

「あが…、ぐぬ…」

「電撃に手心を加えたのは、死なせたら寝覚めが悪い…、とかじゃ  
ないわよ」

「!？」

「計画について知ってる情報、洗いざらい吐きなさい。この計画を  
主導している面子は？アンタ達を雇ったのは誰？」

「（いや、私も間に仲介人が挟まってるし）」

「そういえばさつき誰か来るみたいな事を言ってたわね。アンタみ  
たいなのが他にもいるの？能力者ならその能力は？」

「（はっ、そんなの教えるわけが…）」

ガガガガガガガ  
ガシャーッ

「ッ……」

謎の女が中々口を割らないのも見て、またもや電撃が炸裂しました。  
謎の女にはなくて近くの瓦礫にですが…。

「黒焦げになりたくなかったら、3秒以内に答えなさい」

「（ひいっ）」

「3」

「（わーっ!?!言う言う!）」

「2」

「（麦野達だったら能力バレしたって負けたりしないわよね!!)」

「1」

「……………（アレ?しっ、舌が…、痺れて声が出せない!?)」

謎の女は喉を押さえています。

「0。そう、仲間は売れないって訳ね」

「（違うの!電撃で身体が自由が…ッ）」

「そついつの嫌いじゃないけどね」

カッ

ドオ

ドドドドドドドドドドドオオオオ...

シユウウウウ

突然でした。

壁の一部が溶け始め、レーザー光線が飛び出してきました。お母様はなんとか回避出来たようです。

「あんまり静かだから殺られちゃったのかと思ったけど、危機一髪だったみたいね。フレンド」

フレンドと呼ばれた謎の女は、助けがきた事にホッとしたようです  
が...

「まったく、私らが合流するまでは足止めに徹しろって言うておいたのに、深追いした拳句、返り討ちにあって捕まっちゃうなんて、撃破ボーンナスに目が眩んだからって何やってんだが、ギャラの分配考え直さなきゃねー」

「大丈夫だよ、フレンド。私はそんなフレンドを応援してる」  
助けにきた筈の高飛車な女に地獄に落とされたようです。

「僕が足止めをしますので、お母様は先に進んで下さい」

「ア、アンタ自分が何言ってるかわかってんの!？」

「お母様の目的はまだ達成されていない筈です。此处で、足止めさ

れている時間は無いでしょう？それに電撃もほとんど使用出来ない筈です。此処は僕がやります」

「ッ……、死ぬんじゃないわよ！」

「……………別に倒してしまっても構わんのだろ？」

「！？」

お母様は僕の変化に戸惑っていたようですが、目標達成の為、先に進むことにしたようです。

大丈夫です、お母様。

僕は負けません。

それにしても……、今はなんなんでしょう。

とりあえず、転がってる瓦礫を高飛車女にぶん投げますか。

ガウッ

ギャガ

僕が投げた瓦礫は、あっさりと受け止められ、消滅させられました。

「で、あれが噂のインベーターね」

ブウウウウ

シュン

ゴバツ

高飛車女が先程のレーザー光線を放って来ました。

が、そんなもの当たりません。

ギャギャツ

ドオツ

お返しに遠心力を加えた瓦礫をプレゼントします。

「器用なまねをするわね」

フォンッ

ボシュ

今度はバリアみたいなもの張って防がれました。

「滝壺、使つときなさい」

高飛車女は滝壺と呼ばれた少女に何かのケースを投げました。

僕には関係ありません。

お母様から頂いた電撃で消し飛ばすだけです。

先程からレーザー光線を避けながら電撃を放っていますが、避けられるか電撃を強制的に曲げているようで、まったく当たりません。  
ガガンツ

ボクツ

電撃がパイプに当たったらしく煙が出てきたので、一旦身を隠す事にします。

それにしても…、先程から心が落ち着きません。

一体どうしたと言うのでしょうか？

まるで、自分自身では無いような者が、心にいるように感じます。

「逃げたか、滝壺」

「うん。大丈夫。ターゲットのAIM拡散力場は記憶した」

！？

何か来ます！

ゴツ

…頭の上をレーザーが通り過ぎました。

気付かれましたか？

しかし、逃げる場所、逃げる場所、的確にレーザーが追ってきます。

「かわされた。検索対象は消えていない」

「チツ、天井に飛んだかしら？立体に動き回るってのは面倒ねー」

「（ひゃ〜〜）、相変わらずスツゴイね。壁も天井も関係なし！！

さっすが、学園都市第四位の超能力者『原子崩し』よね」

「ま、あのクモ女を捉えるのも時間の問題かしら。あとは、逃がさないよう追い込んでいきましょ」

「（例え地球の裏側に逃げても位置情報を検索できる滝壺の『能力追跡』と、間にある遮蔽物ごと敵を粉碎する麦野の『原子崩し』結局このコンボから逃げ切れるヤツなんていない訳よ）」

「チツ、うぜエ」

ガガガアッ

先程からレーザーを避けるのが面倒になってきました。それと、内の変化が徐々に外へ出てきているようです。

「フレンダ」

「オツケー、結局施設中に仕掛けといて正解だった訳よ」  
シュバツ

「!?!」

ドドドドオツ

今度はフレンダの爆弾が襲ってきました。なんとか避けることはできません。

向こうには探索系能力者がいるようですね。

「ターゲット、二十メートル北西に移動」

「中々当たらないわね（立体的に動けるっただけじゃない。私の攻撃を察知してるのかもしれないわね。滝壺にも大分負荷がかかってきている。これ以上滝壺を使うのは割に合わないか?）」

「くそ…、一体いくつ仕掛けてるので………、ッ?しま……」

ドオツ

危ないです。

今までの疲労が一気にきたのか一瞬制御が乱れ、爆発に巻き込まれる所でした。

「ッ!？」

最悪です。

このタイミングでレーザーですか…。

これはかわせません。

!!

アレをやってみましょう。

バリツ

ギユオツ

やっぱり曲げることが出来ました。

レーザーは遥か頭上に飛んで行きます。

「!私の『原子崩し』を曲げた…!!? プツ、フフ…、なるほどね」

「ちょ…、ちよつと滝壺!?! いぎっ」

滝壺は能力の使い過ぎにより倒れ、フレンドもまた戦闘で痛めた箇所がズキズキと痛み出した。

「フレンド。滝壺を連れて絹旗と合流しなさい」

「私…まだやれるよ!」

「滝壺のためだけじゃないわ。あなたもあのクモ女から受けたダメージが深刻でしょう。無理してるけど動きが悪いわ。万が一、滝壺に限界が来た場合、敵の反撃を察知できない。私ひとりであなただけ二人を守りきるのは流石に難しいわ。あなた達がここにいるのは危険よ。退きなさい」

「ごめんね。足引っぱって…」

「別に責めてやしないわよ。むしろよくやってくれたわ。二人のお

陰で相手は虫の息だしね。後詰めは絹旗に任せて休んでなさい」  
そう言うと、麦野はミサカの元へ歩き出す。

「（まあ、数で圧倒して勝ちを拾ったとか言われたら癪だしね。第  
三位の超能力者、常盤台の『超電磁砲』！！）」

第六話 八月十九日？（後書き）

：眠いのには眠れないので投稿。

感想・修正等頂けると嬉しいです。

主人公の名前もよろしく願います。  
ではおやすみなさい。

第七話 八月十九日？（前書き）

戦闘上手く書けたかなあ？

次の話で主人公の名前が出る予定です。

それまでに主人公の名前をどしどし送って頂けると嬉しいです。

## 第七話 八月十九日？

攻撃止みました？

見逃す訳じゃないと思いますが…、出方でも窺ってるのでしょうか？  
まあ、このままでは終われないですが。

む、ぬいぐるみ発見です。

これで遊びますかね。

「やーつと来たか。随分な重役出勤ぶりね。！（フ・レ・ン・ダ  
くくッ。後始末しないで離脱しやがったのか）」  
…なんででしょう。

いきなり顔が怖くなりました。

辺りを見回しても、先程の仲間はいないようです。

隠れてるのでしょうか？

「他の仲間は何処ですか？」

「帰したわ。アンタとはサシで勝負したいしね『超電磁砲』」

「すみません。人違いです」

ブンッ

先手必勝とばかりにぬいぐるみ型爆弾を投げ飛ばします。

「（はぁーん、なるほど…）」

バチッ

カッ

ゴウッ

電撃で相手の目の前ぐらいで爆発させますが、防がれました。

「（力が落ちてる分をフレンドの爆弾でカバーしようってか？でも、それじゃあ）自力では私は倒せないと白状しているようなものよ」「爆風も弾きますか…、なら…。」

ヒュ

ぬいぐるみをもう一個投げました。

「（ふん、何度やつても同じ…っ？いや、爆発で身動きを封じた隙に回りこむつもりか？私をスルーして本丸に突っ込んでくる恐れもある）」

ブン

「けどまあ、仕掛けてくる前に撃ち落としてしまえば…」

ガウッ

ぬいぐるみに向けてレーザーを放たれますが、ぬいぐるみには当たりません。

「（何…ッ？）何だ？人形に何か仕込んでる？」

「ぬいぐるみの中に鉄塊を入れました。そうすれば、磁力で操れますので」

「チッ、メンドクセ工真似を…っ」

ドッ

ボンッ

今度は複数のレーザーを放ち、ぬいぐるみは撃ち落とされました。

「数が少なければ撃ち落とせますが、この数はどうですか？」

磁力を操作し、後ろの通路からぬいぐるみをたくさん持ってきます。ゴアッ

む、僕を狙ってきましたか、当たらないですが。

ボン

ポオン

少しずつ撃ち落とされていますが、まだまだぬいぐるみは残っていますよ？

「見た感じ、弾幕を張れるタイプの能力ではないと分析します。ですの…」

「数で圧倒すれば押し切れるって？」

シユバアア

「ッ！？な…」

突如として、能力を弾幕みたいに僕に向けて放たれました。弾幕代わりにはならないと分析したのですが…。

ピン

高飛車女は何か、カードのような物を取り出し、空中に投げました。

キイイイイイイ

シユツ

ドボボボボボボ

カードにレーザーを当てると弾幕の様になり、ぬいぐるみが撃ち落とされました。

「『拡散支援半導体』弱点に対策を講じるのは当然だろうが。『アイテム』を舐めるなよ、クソガキ」

「ッ…」

ピッ

また拡散支援半導体という物を投げ、ぬいぐるみをレーザーで撃ち落としていきます。

「フレンドのマヌケのせいで、ひと手間増えちまったが、中坊のアタマじゃできてこの程度か。まったく、なーにが第三位だ。能力研究の応用が、生み出す利益が基準なせいで、テムエが三位で私が四位？ここでテムエをブチ殺せば、そんなの関係ねえって証明できるのかねエ？」

ゴオオオオ…

たくさんいたぬいぐるみが、残り三体まで減らされてしまいました。

「残りはあと三体か」

ガガン

ガンツ

拡散支援半導体を使わずに他の二体も潰されます。

「あぁン？どうした？まさか、この程度でもう打つ手なし、なんて言うんじゃねえよなあ？」

ドオツ

最後の一体を相手に届かない位置で爆発させます。

「オイオイ、お粗末な上に早漏かよ！最後の最後で萎えさせんじゃねえよ！」

「クククク…、うぜエな、オマエ。下品なんだよ、第四位 麦野沈利…」

「！」

ぬいぐるみの爆発が収まり、ミサカの姿が現れた。

しかし、雰囲気は一切違う。

その姿はまるで、一方通行の様であった。

「テムエ…、何者だ？『超電磁砲』じゃねえのかよ？」

「クハハ…、俺は『超電磁砲』のDNAから造られたクローンだよ。で、俺の母親がどうかしたか？…つっても、ここで死ぬオマエには必要ない情報かア？」

麦野はミサカの霧囲気に吞まれ、一瞬隙が出来てしまった。

その隙を逃さず、ミサカは麦野に向かって走り出し、懐に潜り込む。その速度は異常であった。

百メートルぐらい離れていた筈なのに、気付けば懐に潜り込んでいたのだ。

ミサカはそのまま拳を振り抜いた。

ゴウツ

反応の出来ていない麦野だったが、戦闘経験が豊富故か、ミサカの拳をギリギリかわす。

しかし、体勢を崩してしまう。

其処に追撃の拳が迫る。ズガガガガガ

ズンツ

ダンツ

麦野はとつさに能力を発動し、レーザーはミサカに放つ。

レーザーはかわす事に成功したが、すぐさま蹴りが飛びミサカに直撃し地面を転がる。

麦野はミサカを吹き飛ばした事で、霧囲気に吞まれる前の自分自身を取り戻した。

「ぐツ…」

「おいおい、のんびり寝てんじゃないわよ」

ドドドシユ

ミサカはすぐさま起き上がり、麦野に向かって距離を詰めようとするが、いくつものレーザーによって足止めされる。

しかし、その内の一つを気付かれ無いように、自身の能力で吸収する。

反撃に電撃を放つも、干渉され逸らされる。

「ぎゃははははははは！パリイ！パリイ！パリイ！てかア？笑わせんじゃねえぞクソガキ！お子様のケンカ程度でこの街の『闇』をどうにかできると思ってたのかア！！？」

「ククツ…」

「オラツ！もつと私を楽しませろ！！現代アート風味の面白オブジエになりたくねえならなアツ！！」

「クククク…」

ほぼ一方的になっている為か、麦野は興奮し、ミサカが笑っている事に気付かない。

しかし、次第に笑い声が大きくなる為に、麦野も漸く気付いた。

「あぁン？一方的過ぎて頭でも可笑しくなったかア？そろそろマジメに殺ろうかア？」

「ククク…、じゃあ、俺もマジメに殺ってもいいンかよオ？」

「！？」

そう言うと、ミサカはゆっくり、ゆっくりと麦野を目指して歩き出す。

突如として、ミサカから放たれる威圧感に、またもや麦野は呑まれる。

ドドドドドッ

だが、その威圧感を振り払う様に、レーザーをミサカに放つ。

しかし、ミサカは避ける事もせず、レーザーは直撃した。

… 筈であった。

麦野は驚愕した。

煙が晴れると、麦野の能力を使用しバリアを張っている、ミサカの姿があった。

「！？テメエ、本当に何者だ！？」

「」

しかし、麦野の問いにミサカは答えない。

イラつく麦野は、拡散支援半導体を使用し、レーザーを手当たり次第放つ。

だが、ミサカはバリアで防御するか、もしくはベクトルによる反射を使い、麦野に跳ね返す。

レーザーを放つてもほぼ跳ね返ってくる為、次第に麦野は自身のレーザーを迎撃に裂く事になる。

それだけにはとどまらず、ミサカは電撃を放ち始める。  
ドドドドドドッ

ガガガガガッ

もう二人の距離は殆ど開いていない。

「ガアッ…、クソッ…」

やがて、迎撃出来なくなった麦野は、ミサカの電撃を喰らってしまい、そのまま気絶した。

「チッ…、クソつまんねエ…」

そう言っていると、ミサカの雰囲気は元に戻った。

気付くと、目の前には高飛車女が倒れています。

何が起こったのでしょうか？

まあ、足止めは成功した様なので、この研究所から出る事にします。  
お母様と合流しなくては…。

気絶していた麦野は目を覚まし、二つの計画に目を通していた。  
「何だこりゃ！？第一位様はこんな事やらされてんのかよ。スライムを二万匹ぶち潰してLvアップ！ってか。統括理事会も何を考えて……。へえ、なあるほど、それで『アイテム』をね……。これならブチ殺すより放つてた方が面白そーじゃない。もがき苦しみながら沈んでいくといいわ。学園都市の闇の底に……。ね（ハート）でも、アイツは私が……。」

## 第七話 八月十九日？（後書き）

とりあえずここで一旦休憩です。

次話は、超電磁砲の次巻が出てからか、その前にアップする予定です。

後感想・指摘を頂けると嬉しいです。

それではまた次話でノシ

第八話 八月二十日、二十一日？（前書き）

名前ありがとうございました。  
無事名前決まりました。

第八話 八月二十日、二十一日？

「ふう、なんとか潰せたわね。アイツ大丈夫かしら…」

「只今戻りました、お母様」

一足先に外に出ていたお母様を発見し合流しました。

「アンタ大丈夫だった？怪我はない？」

「大丈夫です。言われた通り、第四位潰してきました」

「…言った覚えはないんだけど。まあ、無事ならそれで良いわ。因みに帰る所あるの？」

自信満々の答えが行けなかったのでしょうか？

お母様は溜め息を吐いて仕舞われました。

「僕は逃げ出した身ですので、帰る場所はありません。と、この前も言っただけですが…？」

「そう」

お母様は、突然携帯電話を取り出し、誰かと会話を始めました。

何故か、お母様は機嫌が悪くなっていきます。

「話は着けたわ。今からアンタは私の妹よ。さあ、一緒に来なさい。

あ、後…、これからは、お、お姉ちゃんて、よ、呼びなさい／＼／

「妹？僕は男ですよ、お姉ちゃん？」

「／＼／良いから行くわよ、真琴／＼／」

「真琴？」

真琴とは誰の事でしょうか？

「そう。今からアンタの名前は真琴よ。なんか文句ある？」  
ブンブンブン

「ありがとうございます、お姉ちゃん」

「／＼／」

僕は慌てて首を振りしました。

名前を付けて頂いたのに、文句なんてありません。

本当にありがとうございます、お姉ちゃん。

そのまま僕は、お姉ちゃんに寮まで連行されました。

扉を開けるとツインテールの女の子がいました。

「あ、お姉様！お帰りなさいませ。って、其方はどなたですか？」

「げ、黒子……。この子は私の……。妹よ」

「？お姉様は一人っ子のはずでは？」

「だああ、うっさいわね。正真正銘の妹よ」

「ねえ、お姉ちゃん。この娘は誰ですか？」

「ん？ああ、一応同室の白井黒子よ」

「なっ、一応ってどういう事ですか！？」

「御坂真琴です。いつもお姉ちゃんがお世話になってます。よろし

くです、白井さん」

「そんな、お世話だなんて……。うふふ／＼／」

「」

頬を染め、くねくねと動く白井さん……。

き、気持ち悪いです。

お姉ちゃんも呆れています。

「はあ……。とりあえず、真琴は今日から此処に住む事になったから、よろしく」

と、言ってお姉ちゃんはベットに倒れます。

僕は何処で寝れば？

「え、っと？それは良いですが、真琴さんは何処で御寝になるので？」

「そりゃあ、もちろん私と一緒に寝るわよ。アンタと一緒にだと危険そうだし…。ほら、隣で寝なさい」

お姉ちゃんの横で寝れば良いのですね。

それではおやすみなさい。

その後の討論の果てに、白井さんがお姉ちゃんに電撃を喰らう事件がありました。僕は知りません。

翌朝、僕が目を覚ますと、お姉ちゃんと白井さんは居ませんでした。ですが、僕の髪がポニーテイルになっていました…。

まあ、良いです。

机の上には携帯と財布、そして僕宛てのメモが置いてありました。

『携帯電話は真琴の為に用意したから、絶対持ち歩きなさい。あと、今日服買いに行ってきたさい』

との事ですか。

とりあえず場所が分からないので、寮監という方に聞いてみましょう。

怖そうだな寮監でしたが、意外に優しく地図まで頂きました。服ならセブンスミストが良いと言う事なので、そこに向かう事にします。

「みーつけた」

その途中で、誰かから声を掛けられたと思い、後ろを振り返ると、嫌なの人に会って仕舞いました…。

「…なんでしょう？」

「…今から昨日テメエにやられた分、兆倍にして返してやるうかア？」

「…僕、服買いに行く所なんですけど？」

腕を掴まれ、どこかの廃墟に連れ込まれました。連行途中で小さな服屋に入り、服を全て買い占め僕にプレゼントして頂いたのは余談ですね。

こんなに服頂いて、どうしよう…。

さて、僕の目の前には、昨日戦った『アイテム』という組織の三人と、初めて見る女の子が居ます。

この女の子も『アイテム』の一員なのだろうか？

「これが麦野が超気に入った子ですか、まるで女の子みたいですな」

「私が気に入ったのはコレじゃないけどな」

「どういう意味ですか？超同一人物ではないのですか？」

「ええ、同一人物よ。でも性格が違うのよねー」ブンツドシユ

麦野が突如能力でレーザーを撃つてきました。

この距離では避けられません。

僕の意識ではなく、別の人格が表に出るのを感じました。

ドオオンツ

「「「!?!?」「」」

「出てきたようね」

麦野が放ったレーザーは近距離であったにも関わらず、レーザーは麦野達の背後にある壁を破壊した。

その事実には麦野以外は驚くが、それ以外にも驚く事になった。

「チツ、うぜエな。またお前かよ、麦野沈利。昨日だけじゃ満足出来ねエ、つてかア?」

またもや、いきなり変わった真琴の雰囲気には麦野以外は固まり、恐怖する。

「フッフ、やっぱり良いわね。アナタ『アイテム』に入る気はない?」

「はア?」

「アナタが『アイテム』に入れば、アナタは強い奴と戦える。そうならばアナタは暴れられるでしょ?」

「む、麦野本当に良いの?」

「フレンドの言う通りです。超危険人物なのでは?」

「…同感」

「良いのよ。此方は戦力が増えるし、悪い話では無いはずよ?」

麦野は、真琴の人格が戦闘や空気によって代わると考えたようだ。

「…」

麦野に言われた言葉に、真琴は考える素振りをする。

暫く考え込んだ真琴は、考えた末結論を出した。

「まあ、いつでも表に出れる訳じゃねエからなア…。一つ条件がある。『超電磁砲』と敵対してる場合、俺は『超電磁砲』に付く。そ

んでも良いなら、その提案…、受けてやるよ」

「そう。ようこそ『アイテム』へ、歓迎するわ。とりあえず、アナタの名前を覚えてちょうだい?」

「御坂真琴。よろしく」

「…麦野が決めた事なら、フレンドです」

「絹旗最愛です。なんか超怖いんですけど…」

「…滝壺理后、…よろしく」

「知ってると思うけど、リーダーの麦野沈利よ。真琴、携帯も寄越しなさい」

真琴は携帯を麦野に放り投げた。

自己紹介、連絡先の交換も行ったので今日は解散ということになったのだった。

その後真琴は、服を運ぶのに大変手間取ったそうなの…。

第八話 八月二十日、二十一日？（後書き）

『アイテム』の口調がよく分かりません…。

特に麦野が…（汗）

感想などあれば、お待ちしております。

第九話 八月二十一日？（前書き）

今回から禁書目録に突入しました。

## 第九話 八月二十一日？

- 常盤台寮内 -

麦野に頂いた服を運ぶのに、一苦勞した僕は部屋に戻ると荷物をベツドの横に放置し、先に帰宅していた白井さんへの挨拶をそこそこにベツドに倒れ込みます。

白井さんは、能力を使って荷物を運んでくれました。

するとそこに、インターホンが鳴り響きました。

白井さんが対応してくれたのですが、

コンコンッ

「どうぞ。鍵はかかっていますので、ご自分の手で開けてくださいですの」

暫くするとノックの音が聞こえ、知らないツンツン頭の男の人が入ってきました。

「！！？」

男の人は、何故か僕を見て驚いています。

まあ、それよりも何故白井さんが僕が寝ている横に腰掛けているのでしょうか…？

「此方は御坂真琴さんです。お姉様の妹だそうですの」

「御坂真琴、よろしく」

「あ、上条当麻です」

「ごめんなさい。元々寝て起きるための部屋ですので、客人をもてなすようにはできていないんです。お姉様を待つのでしたら隣のベツドに腰掛けてくださいですの」

「……、いや。まずいだる流石に本人の許可も取らないで」

「ご心配なさらず。そちらがわたくしのベツドです」

「アンタ何やってんだ！？他人のベツドの上でごろごろしちゃって

変態さんかよ！」

「む、変態とは聞き捨てなりませんの。人間、人には言えないもののみんな心の中ではこれぐらいオツケーと考えているものです、ほら好きな女の子のリコーダーに口をつけたり自転車のサドルをパクってきたり」

「しねーよ！一体どうしたらそんな純粋な気持ちがそこまで歪んで表現されるんだ！美琴といいお前といい、お嬢様ってのはこんなモンなのかーっ！」

「お姉ちゃんと、その変態さんを一緒にしないで欲しいのですが……？」

「ちよ、ちよつと！？」

上条さんが叫ぶと、白井さんは納得できないと頬を膨らませていましたが、僕の言葉に慌てたようです。

「けど、お姉様なんて言ってるからてつきり後輩だと思っただけど。同級生だったんだな」

上条さんの腕の中に、黒猫がいるのを発見しました。

僕は上条さんの方に手を差し出すと、上条さんは意図を察してくれました。手で、手の中に黒猫を預けてくれました。

その後、僕は黒猫に夢中で二人の会話など聞いていません。

暫く黒猫と遊んでいると、ドアの向こうの通路からカツコツという足音が聞こえてきました。

すると、白井さんは突然ベッドから飛び上がりました。

「うわまずい、寮監の巡回のようですね！」

「……、は？」

「ど、どうしましょう。あなたの事が寮監に知れるとまずい展開になりますのね」

「寮監つて、随分はつきり断言するんだな。足音聞いただけで分かるのかよ」

「足音聞いただけで分かる程度には危険な存在という事ですよ。とにかく抜き打ちで部屋をチェックしていく邪悪な存在ですので、あなたはベッドの下にでも隠れていてくださいませ」

と言ったすぐに、白井さんは上条さんをお姉ちゃんのベッドの下へと押し込んでいます。

「痛てっ！テメエちよつと待て無理だろこの隙間は普通に考えて普通に！」

「常盤台の女子寮に殿方がいる方がよほど普通ではありませんという事ですよ！ええい面倒臭いもう空間移動で……っつて、あら？あなたどうして私の力が働かないんですの！」

「いやそれきつと、俺の右手が……っつて痛い！聞けよお前は！」

そんなこんなで、上条さんはベッド下へ収納されました。

その後すぐに、寮監がノック無しに入ってきました。

「白井。夕食の時間だから真琴を連れて食堂へ集合せよ。……、御坂美琴は？私は外出届を見ていない、門限破りなら同居人と連帯責任で減点一つとみなすが構わんか？」

「いえいえ、本当に急な用件ならば外出届など提出している暇はないと思いますの。わたくしはお姉様を信じて減点を受け取る事ではありません」

白井さんは、ぐいぐいと寮監の体を押しながら僕を連れて部屋を出ます。

「まあ良いが、……真琴。服は買えたか？……後、その猫はなんだ？」

「服、麦野が店の中全部買ってくれました。この猫飼ってもいいですか？」

「……」

どうしたのでしょうか？

寮監と白井さんは突如固まって仕舞いました。

「あの量……、そういう事でしたの……。第四位の方とどこで知り合っ

たのやら……」

「服は良いとしよう。だが猫は……」

「飼ってもいいですか？」

「……分かった。許可しよう」

寮監は渋々といった感じで頷いてくれました。

猫を飼うことを許可して頂いたので、色々と買う必要があるので外に行きましょう。

「待て、真琴。何処に行く気だ。もう門限は過ぎているぞ？」

「買い物です」

僕は寮監に向かって微笑みます。

「だから門限は……」

「買い物です」

「……分かった。……許可しよう」

寮監に許可も貰った事ですので、僕は買い物に行きます。

「はあ……」

寮監の溜め息が聞こえたような気がしましたが、気のせいですよな？

この日、常盤台女子寮では、寮監は御坂真琴に弱い。  
と、噂が広まったのだった。

第九話 八月二十一日？（後書き）

感想などあればお待ちしております。

第十話 八月二十一日？（前書き）

今回は結構短い？

## 第十話 八月二十一日？

『現実には甘くない。』樹形図の設計者』気象データ解析という建前で学園都市が打ち上げた、人工衛星『おりひめI号』に搭載された、世界最高のスーパーコンピュータ。月に一度、地球上の全ての空気の粒子の動きを完全に予測して一月分の天気をもとめて演算し、他の日は、学園都市に数多ある研究の予測演算に使われている。そして-』

「…私、あの飛行船って嫌いなのよね」

「どうしてですか？」

『そして-、二万人のクローンの製造と殺害を指示した超高度並列演算器』

「機械が決めた政策に人間が従ってるからよ」

『二度とイカした指示を出せないように、計画を改竄した上でぶち壊す!!-』

『妹達』を救う為、美琴は学園都市に反旗を翻した…。

『…二万人妹達の製造法は元あった計画のものをそのまま転用する。超電磁砲の毛髪から抽出した体細胞を用いた受精卵を用意。』

これにZid-02、Riz-13、Hel-03等の投薬を用いて成長速度を加速させる。

しかし、我々はそれとは別に、一人の実験体を用意する事にした。超電磁砲の毛髪から抽出した体細胞と、一方通行の毛髪から抽出した体細胞を合わせた受精卵を用意し、その後の製造法は同じである。結果、おおよそ一四日で超電磁砲と同様、一四歳の肉体を手にする事ができる。元々劣化している体細胞を用いたクローン体である事、投薬において成長速度を変動させている事から、元の超電磁砲より寿命が減じている可能性が高いが、実験中に性能が極端に変動するほどではないものと推測できる。

むしろ問題なのは肉体面ではなく人格面である。

言語・運動・倫理など基本的な脳内情報は零〜六歳時に形成される。だが、異常成長を遂げる妹達に与えられた時間はわずか一四四時間弱。

通常の教育法で学ばせる事は難しい。

よって、我々は洗脳装置を用いてこれら基本情報を強制入力する事にした。

しかし、例のクローンのみその限りではなく、最初から言語等を理解する事ができ、寿命はオリジナル以上である可能性が高い事が判明した。

- 最初の九八零二通りの「実験」は所内でも行える。

だが、残り一零一九八の「実験」は戦場の条件上、野外で行うしかない。

死体の処分などの関係から、我々は戦場を学園都市内の一学区に絞って-

例のクローンは絶対能力への進化法と同時進行で研究するが、能力は不明のまま逃走-』

御坂真琴が猫を連れて行った為に、物語は変わった。  
それを知るのは世界のみである。

空の色は闇夜の海のような黒色へと変わっていた。

今宵は三日月。

嘲笑う口に似た細い月の光は弱すぎる。

一人、能力を用い闇夜の中移動する者がいた。

御坂真琴は今宵、実験が行われようとしている場所へと向かっていた。  
た。

その途中、同じ方向へ向かう少女を発見する。

御坂美琴は走っていた。

自分自身を犠牲にし…、実験を止める為に。

だが、そんな美琴の前に突如、自身のクローンであり、今では弟である御坂真琴が現れた。

因みに、常盤台では妹となっている。

「お姉ちゃん、何処に行く気ですか？」

「ッ！私は何処で何してようが勝手じゃない」

「まあ、良いですが…、お姉ちゃんに宣言します。僕が実験を止めます。お姉ちゃんは高みの見物でもして置いて下さい」

「…ちよ、ちよっと…」

真琴は空間移動で美琴の前から消え去ったのだった。

美琴は心配になり、実験場所へと走り出した。

実験場所に辿り着くと、真琴と一方通行の殺し合い、という名の戦いは始まっていた。

第十話 八月二十一日？（後書き）

感想等お待ちしております。

第十一話 八月二十一日？（前書き）

あついで……

## 第十一話 八月二十一日？

真琴が辿り着いたのは、この間一方通行と戦った列車の操車場だった。

路線バスで言うなら車庫に当たる、たくさん電車を整備したり、終電を走り終えた列車を置いておく場所だ。

学校の校庭ぐらいの広さの大地には線路と同じような砂利が一面に敷き詰められ、十本以上のレールが平行にズラリと並んでいる。

線路の先には港の貸し倉庫みたいな、大きなシャッターのついた車庫が並んでいて、操車場の外周をぐるりと取り囲むように、貨物列車に使う金属コンテナが大量に置いてあった。操車場には人気はなく、戦闘の後もなかった。

終電が完全下校時刻という学園都市では、操車場からも早々に人気がなくなる。

作業用の電灯も落とされ、周囲に民家もない状態なので光もない。そこは二百三十万人もの人間が住む大都市にも関わらず、夜空を見上げると普段は見えない星の瞬きまで見つけられるほどの闇に包まれていた。

そんな無人の闇の中に、ソレは立っていた。

学園都市最強の能力者、一方通行。

黒い闇の中、白い少年は笑う。

「時刻は八時二十五分ってトコかア。ンじゃ、オマエが次の『実験』のダミー人形って事で構わねエンだな？」

引き裂かれる笑みの口から、白い闇が噴き出したような一方通行の声。

しかし、真琴は眉一つ動かさない。

「……、チツ、調子が狂う」

と一方通行は吐き捨てた。

「まア、俺が強くなるための『実験』に付き合わせてる身で言えた

義理じゃねエンだけどさ、平然としてるよなア、ちつとは何か考えたりしねエのか、この状況で」

「検体番号一零零三二号です。今回の『実験』は私の筈ですが、その方は誰ですか？とミサカは問います」

一方通行と真琴が対峙している所に、今回の『実験』に付き合う筈であるミサカが現れた。

「誰だオマエ？」

一方通行がミサカの言葉に反応し、真琴に敵意を見せた。

「誰だオマエ？そりゃねエだろ。この間、同じ場所でテメエと殺りあつたんだぜエ、俺とオマエは」

「……、チツ、あん時のヤツかア。殺り損ねたつてかア？」

と一方通行は頭を掻く。

「ああ、そうだよオ。もう一度殺り合おうぜエエエ！」

真琴は一方通行に向かって走り出した。

「ボロボロになった口が吼えてンじゃねエぞ、三下アアア！」

一方通行は迫りくる真琴を殺す為、迎撃しようとする。

本来『実験』に付き合う筈のミサカを置いて、一方通行と真琴の殺し合いがここに始まった。

灯りのない操車場に、カメラのフラッシュのような青白い閃光が瞬く。

御坂真琴と一方通行、二つの足音が砂利を蹴る。

両者の距離は、十メートルもなかった。

「ハッ、何だア無策にのこのこ歩いてきやがって。んなに痛みが好きならたっぷり鳴かせてやるから今から喉飴でも舐めてる！」

一方通行が両手を広げたまま身を屈め、獣のように御坂真琴へ肉薄する。

一方通行に防御という概念は必要ない。

攻撃という概念すら必要ない。

あらゆる攻撃を反射し、触れただけで相手を必殺する人間にとって戦いとは、ただいかにして確実かつ最速で相手に接触するか、それだけを考えれば良い。

あらゆる攻撃を反射する以上、その足を止める事はできない。

まるで人間のデモ隊の真ん中に戦車が突っ込んでいくような、あまりに理不尽な暴力を前にして、真琴は

「ああ!？」

一方通行は驚く他ない。

真琴は前に出る一方通行に向かって、自らも前に進んで来た。

真琴も防御を考えてはいなかった。

両手をポケットに突っ込んだまま一方通行へと歩み寄り、蹴りを放った。

「ハッ、つまんねエヤロウだなオマエ、んな事やったって無駄なんだっつの分かん…」

蹴りなど効かない、と防御も迎撃もしない一方通行であったが、

ぐしゃり

真琴は当然のように、一方通行の顔面を蹴り飛ばしていた。

「あ、は?い、たい。はは、何だよそりゃあ?面白エ、ははは、ちくしょう。イイぜ、最っ高にイイねエ。愉快に素敵にキマっちゃまったぞ、オマエはア!」

まるで孵化寸前の悪魔のように地面にうずくまり、白い少年は狂熱に笑う。

御坂真琴の能力は、【究極闘法】。

詳しくは、太陰道。

敵、味方問わず、触れた相手の力を我が物とする能力である。これによって、上条当麻の『幻想殺し』を手に入れていた。

よって、一方通行と御坂真琴の殺し合いは一方的なものになる。

一方通行の触れただけで人を殺す右手が、真つ直ぐ真琴を狙う。

が、右手を避けた真琴は、一方通行の懐へと潜り込んで、カウンタ―気味に拳を放つ。

「ぐぶあ!？」

真琴の拳は一方通行の顔面へ突き刺さった。

その後も、一方通行は真琴に向けて拳を振るが、二度、三度と避けられ逆にカウンターの拳が顔面を襲う。

「……、チツ、つまんねエ。ヤメだ、ヤメ。テメエ、弱すぎんだよ」

一方通行との殺し合いに飽きた真琴は、そう吐き捨てる。

そして、一方通行に背を向け歩き出した。

興味が無くなり、自分に背を向けて歩き出す、その行為に一方通行は、耐えられない。

学園都市で最強というプライドが、現実との狭間に揺れる。鼻を潰すような未知の痛みが一方通行の集中を削ぎ落とす。

「クソ。クソオ!クソオオオオオオオオオ!」

吼える一方通行の足元が爆発した。

弾丸のように真琴へと跳ぶが、後ろからの奇襲をも避けられる。

避けた反動を利用し、一方通行の意識を刈り取る為の『本気』の蹴りが顔面へ突き刺さった。

真琴の蹴りは一方通行の体をなぎ倒し、地面の上へ転がしただけで、気絶させる事は出来なかった。

「はっ……ハア……!？」

一方通行は上体を起こし、前を見る。

そこにゆらりと近づく御坂真琴の姿を確認して、手だけを使ってずるずると後ろへ下がる。

痛い。

全ての攻撃を自動的に『反射』してきた一方通行にとって、それは未知の感覚だった。

彼にとって痛点とは皮膚から快感を脳へ伝える器官にすぎない。

『痛み』に対する耐性をまるで持たない幼い痛覚神経が、過剰な信号を受けて焼き切れそうになっている。

「うっぜエなアア！」

真琴は、ゆっくりと一方通行に近づく。

「殺した方が早いつてかア？」

「ひっ」

一方通行の動きがビクリと止まる。

だが、真琴は止まらない。

「嫌だ」

一方通行は首を横に振った。

一方通行には『負ける』という事がどんなものか分からない。

生まれてこの方、一度も負けた事のない一方通行には、『負ける』という事に対する耐性が一切ない。

当たり前だ、今の今まで『負けるかもしれない』と思う事すらなかった人間なのだから。

しかし、それでも真琴は止まらない。

その前髪が夜風になぶられ、まるで墓場に咲く名もなき花のように揺れていた。

「（……、風？）」

追い詰められていた一方通行は、不意に気づいた。  
風。

「く、」

一方通行は笑う。

真琴は立ち止まった。

何か得体の知れない危機感を感じ取ったのか、一方通行はそう思ったが気にしない。

気づいた所でもう遅い。

「くか、」

一方通行の力は、触れたモノの『向き』を変えろというもの。  
運動量、熱量、電力量。

それがどんな力であるかは問わず、ただ『向き』があるものならば  
全ての力を自在に操る事ができる、ただそれだけの力。

「くかき、」

ならば、同様に。

この手が、大気に流れる風の『向き』を掴み取れば。

世界中にくまなく流れる、巨大な風の動きその全てを手中に収める  
事が可能 - ツ！

「くかきけこかきくけききこかきくこくけけこきくかくけ  
けこかくけきかこけきくくききかきくこくけくかきくこけく  
きききこきこきかか - ツ！」

一方通行は見えない月を掴むように、頭上へ手を伸ばす。

轟！！

と音を立てて風の流れが渦を巻く。

目の前の少年の顔色が変わった。

今さら気づいた所でもう遅い。

すでに一方通行の頭上には、まるで地球に穴が空いたような巨大な  
大気の渦が、球形を取って砲弾のように待機している。

バチバチと辺りの砂利が舞い上がり、直径数十メートルに及ぶ巨大

な破壊の渦が歓喜の産声をあげる。  
一方通行は笑いながら、殺せと叫んだ。  
世界の大気をまとめあげた破壊の鉄球は風を切り、風速一二零メートル - 自動車すら簡単に舞い上げるほどの烈風の槍と化して、見えざる巨人の手はいとも容易く少年の体を吹き飛ばした。

風が死に、音が死に、大気が死んだ。

一方通行は己が作り上げた惨状を見渡す。

操車場の地面を覆っていた砂利は風の塊に舞い上げられ、所々は土の地面が見え隠れしていた。

二十メートルも吹き飛ばされた少年は壊れた風力発電のプロペラの支柱に背中から激突して、ずるずると地面へ崩れ落ちている。

どうせなら砂利の上を転がった方が愉快的な展開になっただろうが、どの道辿る道は同じだろう。

風速一二零メートルで何かに激突するのは、交通事故で自動車にノブレーキで撥ね飛ばされると大差ない。

実際、崩れ落ちた真琴はピクリとも動かず、支柱の下でぐったりと手足を投げ出していた。

生きているかどうかも疑わしい状態だ。

「……、ふん」

とっさに考え付いた事とはいえ、想像以上の威力だった。

だが、これはまだ未完成だろう。

自動的な『反射』と違い、『向き』を自分の意志で変更させる場合は当然、『元の向き』と『変更する向き』を考慮しなければならぬ。

風 - - 大気の流れとは、カオス理論が絡む複雑な計算を必要とする。『樹形図の設計者』でも使わない限り完全な予測などできない。

人間一人の頭で、世界中の大気の流れを演算できたとは思えない。今のはせいぜい、学園都市の中の風をそこそこ操った程度だろう。

だが、それにしてもこの威力。  
もはや絶対能力など必要ない。

より完璧に、より正確に風の流れを計算できれば、それこそ世界を滅ぼす事さえ可能な力を手に入れられる。

世界は、この手の中にあつた。その感動が、一方通行の全身を駆け巡つた。

自分が敗北の縁まで追い詰められたからこそ、その勝利の感覚は胸が詰まるほど生々しく伝わってきた。

改めて確信する。

一方通行を止められるものなど、この世のどこにも存在しない。

核爆弾だろうが正体不明の能力だろうが、そんなものは何の障害にもならない。

「く、」

一方通行は、ついに笑い出した。

「何だ何だよ何ですかアそのザマは！結局デカイ口叩くだけで大した事ねエなア！おら、もう一発かましてやるからカツコ良く敗者復活でもしてみろっつもの！」

一方通行は夜空を抱くように両手を広げて頭上へ吼える。

「空気を圧縮、圧縮、圧縮ねエ。はん、そうか。イイゼエ、愉快な事思いついた。おら、立てよ負け犬。オマエにやまだまだ付き合ってもらわなきゃ割りに合わねエンだっつもの！」

真琴は答えない。

暴風と狂笑だけが墓地に流れる死風のように吹き抜けていた。

美琴は最初から真琴の戦いを見ていた。

最初は良かったものの、その後何度も何度も一方通行との間に割つていこうと考えた。

だが結局、美琴は今の今まで傷つきボロボロになっていく真琴の姿を黙って見ている事しかできなかった。

けれど、もう限界だ。

これ以上あの子を一人で戦わせては、死んでしまつかもしれない。

「止まりなさい、一方通行！」

美琴は何メートルも離れた場所から、その手を突き出した。

握り締めた手の親指にはすでにコインが乗せられている。

美琴の全身から紫電が溢れる。

だが、一方通行はそんな美琴の事など見向きもしない。

やれるものならやってみると言わんばかりに、さらに暴風が力を増す。

攻撃すれば攻撃した分だけダメージは跳ね返る。

強力な一撃を浴びせれば浴びせるだけ、その衝撃は舞い戻る。

「……、っ」

美琴の指が震えた。

それでも、美琴は顔を上げる。

敵が勝てる相手だから、誰かを守りたいのではない。

誰かを守りたいから、勝てない敵とも戦うのだから。

「ク、クク、カカカカア……」

美琴の知っている声が笑っている事に気づいた。

「……、どけ。アイツは俺が殺す！」

御坂真琴の叫びに、美琴の手がピタリと止まった。

何時の間にか立ち上がっていた真琴は、美琴を押しつけた。

そして、ゆっくりとロボロボの体で一方通行へと歩き出す。

そんな真琴を嘲笑うように、一方通行は両手を広げて夜空を見上げる。

瞬間、街中を流れる『風』が一点へ集中した。

一方通行の頭上、百メートルの位置。

そこへ暴風が集められた瞬間、何か溶接のような眩い白光が生まれる。

高電離気体。

空気は圧縮される事で熱を持つ。

ディーゼルエンジンなどはこれを利用した内燃機関だ。

あまりの圧縮率で凝縮された街中の空気は、摂氏一万度を超える高熱の塊と化し、周囲の空気中の『原子』を『陽イオン』と『電子』へ強引に分解し、高電離気体へと変貌させてしまう。

一点のみの光点は、周囲の空気を呑み込み一瞬で直径二十メートルに膨れ上がる。

だが、一方通行の背後で、何か物音が聞こえた。

「……、ッ！」

一方通行は、恐る恐る振り返り、一方通行の喉が、砂漠のように干上がった。

真琴が一方通行のすぐ側まで近づいていた。

「面白エよ、オマエ……」

一方通行は頭上の高電離気体を

「……最っ高に面白エぞ、オマエ！」

真琴に向けて放った。

高電離気体は真琴に直撃した。

直後、あらゆる音が吹き飛ばされた。

だが、煙幕を上げる煉獄の中を、真琴は平然と歩いてきた。

「ク、クク、…核を撃っても大丈夫。だったかア？ テメエのキャッ

チコピーはア？」

高電離気体が直撃しても平然としている真琴に、一方通行は御坂真琴を撃破するために拳を握って駆け出した。

地面を蹴る足の力の『向き』を変更し、砲弾じみた速度で真っ直ぐに真琴の懐へと飛び込んできた。

一方通行の両手が真琴の顔面へと襲いかかる。

瞬間、時間が止まった。

真琴は身を低く沈めることによって、一方通行の右手を避ける。

今度は左手が迫るが、

「歯食いしばれ、最強オ！」

それに構わず真琴の蹴りが飛ぶ。

「テメエはここで死ねエ！」

瞬間。

一方通行の左手よりも早く、真琴の蹴りが一方通行へと突き刺さった。

その華奢な白い体が勢い良く砂利の敷かれた地面へ叩きつけられ、乱暴に手足を投げ出しながらゴロゴロと転がっていった。

第十二話 八月二十一日？（前書き）

ちよっとした小話です。

## 第十二話 八月二十一日？

- 夜中 -

一方通行との戦いが終わり、力尽きた真琴は病室の一室に収容されていた。

その一室には『アイテム』のリーダーである麦野が、椅子に座って眠っている真琴を見ていた。

「まったく、何してるんだか……」

麦野はそのまま、真琴の頭を撫で出した。

それを病室の扉から覗き見ている集団がいた。

「……どういふ状況ですか、コレは……。超不思議なんですけど……」

「……同感」

「……まさか、あの麦野がね〜」

「………#」

その集団は『アイテム』のメンバーと御坂美琴であった。

というか、何故仲良くなってる……。

数日前は殺し合ってた筈ですがね……。

病院の前でその集団は鉢合わせした。

初めは睨み合っていたが、同じ病室に行った為真琴の友達だと思っただのか、敵意は無くなっていた。

いざ中に入ろうとすると先客がいた。

そして冒頭に戻る。

「ふう、元気になったらハトハトになるまで働かせてやるからね。」

覚悟しときなさいよ……。今はゆっくり休みなさい。第零位 『究極闘法』御坂真琴」

麦野は独り言をつぶやいていた。

第零位 『究極闘法』御坂真琴。

一方通行を倒した為に、真琴は規格外という事で第零位に入ってしまった。

そして麦野は、寝ている真琴にキスをした。

「「「おお」」」

「……# #」

『アイテム』のメンバーは歓声を上げるが、美琴は怒りに満ちていた。

「あの女アツ！……」

怒りが爆発した美琴は、病室内に叫びながら入ろうとするが、絹旗に後ろから抑えられ、フレンダと滝壺に口を手で塞がれてしまい、中に入れない。

その後、麦野が病室から出てきてしまい。

覗き集団と鉢合わせした。

その後の事は、誰も語らない……。

第十二話 八月二十一日？（後書き）

その後何があったか、ご想像におまかせします。

第十三話 八月二十八日 二十九日？

- 学園都市外海の家 -

「何で、こんな事になってんだよオ……」

一方通行との殺し合いから、約一週間がたっていた。

真琴は約一週間、『アイテム』の下僕のように他の暗部組織を潰していた。

原因は、他の暗部組織が『アイテム』を襲撃してきたからである。

理由は、第零位に君臨する御坂真琴の存在が『アイテム』に在籍しているからなのだが……。

因みに、その組織にいた能力者は、全て真琴に能力を奪われた後に殺されている。

今日真琴は寮の部屋で一日中、ゴロゴロする予定であった。

しかし、朝早くから携帯が鳴る。

携帯を開くとそこには上司の名前があり、真琴は無言で携帯を放置した。

そのまま寝ていた筈なのだが、土御門元春という男と神裂火織という女に拉致され、学園都市外の海にいた。

話を聞くと、なんでも『グループ』と『アイテム』が共同で『御使墮し』という事件を解決しなければ行けないらしい。

という訳で『アイテム』からは真琴が派遣される筈だったのだが、電話に出ないので直接拉致したようだ。

「…ぶざけんじゃねエ。俺の休みが……」

「いいから、来るぜよ」

「そうですね。早く上条当麻を見つけなくては……」  
真琴に拒否権は無く、土御門と神裂に連れてかれるのであった。

その後、まもなく上条当麻を発見した為、放置された真琴は海の家へと避難した。

しばらく食事をした後風呂に入ったが、神裂に遭遇したので出る事になった。

暇になった真琴は夜の砂浜に座っていた。

その真琴の横に、赤いシスターが砂浜の上に寝そべっていた。  
歳にして十三歳の少女。

緩やかにウェーブする長い金髪に月明かりを反射するような白い肌。  
可愛らしい容姿の少女だったが、身につけているモノ全てが異様だった。

本来なら修道服の下に着るインナースーツの上に外套を羽織っただけ。

インナースーツと言ってもほとんどワンピース型の下着みたいなもので、もはや華奢な体のラインを誇示しているようにすら見える。  
しかもあちこちに黒いベルトや金具がついていて、拘束衣としても使えるように作られているらしい。

さらには太い首輪から伸びた手綱、腰のベルトには金属ペンチや金槌、L字の釘抜きやノコギリなどが刺さっていた。

それらは決して工具ではない。  
人肉を潰し人骨を削り人体を切断するために用いられる、魔女裁判専門の拷問具だ。良く見れば、工具と違い細かい改造が施されているのが分かる。

無数の拷問具に彩られた少女は、しかし全く表情を動かさない。

少女がため息をついた、と思ったらのそり、と立ち上がり、何の予備動作もなく海の家を駆け出した。

「なんだア？」

海の家で何か異常が起きたようだが、真琴は動かない。その後しばらくしてから、真琴は海の家へと向かった。

「ああ、あれは敵ではありませんよ。ロシア正教の『殲滅白書』のメンバーだそうです」

「ま、イギリス清教が『魔女狩り』に特化したっていうなら、ロシア正教は『幽霊狩り』に特化したって感じかやー。彷徨う火霊、見えざる幽鬼、身籠る女霊……その他諸々『あらゆる者』専門のゴーストバスターズって所ぜよ」

真琴が海の家に入ると、上条当麻に赤いシスターを紹介している所だった。

真琴は面倒くさそうな臭いがしたので、赤いシスターと自己紹介と握手だけしその場から去った。

翌日、真琴が目を覚ますともうお昼を過ぎていた。

あまりの暑さによって、真琴は何もやる気が起きないでいた。

上条の家族が上条がいないと騒いでいたが、真琴は気にせず姉の姿をした上条の従妹と扇風機の前で寛いでいた。

「あれー？おにーちゃんどこ行ってたの？」

そこへ上条当麻が帰ってきた。

「いきなりいなくなるからみんな心配したんだよ？もう海で遊ぶの中止にして搜索しまくったんだから。出かけるなら出かけるって誰かに言うなりメモ残しとくとかしなさー」

「父さんは？どこにいる」

「浜辺、じゃないかな？詳しい場所なんて知らないわよ、みんな散

り散りになっておにーちゃんの事捜し回ってるんだから。あ、私はサボってんじゃないなくて連絡係だからね。ホント、後でみんなに謝った方がいいよ」

「ああ」

と上条は頷いて浜辺へと向かった。

何か事件が起きそうな予感がした真琴は、しばらくしてから向かう事にする。

外に出ると先程まで夕暮れだった筈の空が、夜になっていた。

その夜空の中に赤いシスターが存在していた。

浜辺には神裂が赤いシスターと対峙していた。

ズバン！！

赤いシスターの背中が爆発した。

その背から羽のように飛び出したのは、しかし白鳥のような優美な翼ではない。

それは氷細工でできた孔雀の翼に似ていた。

水晶を削って作ったような鋭く荒げするな翼が何十と集まり、剣山のように飛び出した。

同時、『神の力』の背後にある海水が、不規則にうねる。

まるで巨大な蛇か海龍のように飛び出した、何十トンという膨大な海水が赤いシスターの背中へと殺到する。

背と海水が接合し、巨大な水の翼へと変貌する。

天に刃向かいし、凍える数十もの翼。

最後に、『神の力』の頭上に一滴の水滴が浮かぶ。

それは小さく円を描くと、中空に浮かぶ輪となって固定された。

そのどれもが深夜の海面のような、黒の濁った死を招く蒼。

羽の尾から羽の先まで余さず『天使の力』が行き通ったそれらは、

一本一翼で山を根こそぎ吹き飛ばし、地を抉って谷を築く天罰の一撃だ。

普段、戦場では敵が恐れて道を開けるほどの実力を持つ神裂だが、その神裂でさえ緊張しているように見える。

「まったく、大層な役目を安請け合いましたものです」

神裂は、わずかに重心を落とす……、そこで気づいた。

「？土御門、どこにいるのですか？土御門？」  
いない。

いつの間にか、ちゃっかり土御門の姿が戦場からいなくなっている。だが、土御門の代わりに御坂真琴がいた。

「……おい、…アイツ逃げたのか？」

「ま、あれはそういうヤツです。放り捨てても自力で生存するでしょう。さて、私達も自力で生存しなければなりません。御坂真琴、決して邪魔だけはしないように。それでは、『唯閃』の使用と共に、一つの名を」

そうして、神裂火織は告げる。

「……救われぬ者に救いの手を」

「ハッ、誰に言ってるんだア？そっちこそ邪魔すんじゃねエぞオオ！」  
真琴も叫びながら戦闘に参加する。

此処に、天使 vs 聖人 & 超能力者 の戦いが始まった。

## 第十四話 八月二十九日？（前書き）

意見を募集します。

真琴は学校に通った方が良いかなあ？

もし通うならどこの学校が良いかなあ？

この二つを募集します。

意見を参考に学校に通うかどうか決めたいと思います。

うまくいくかわからないですが、よろしく願います。

無理だと判断したら作者が……、

この後は察して下さいorz

## 第十四話 八月二十九日？

神裂と真琴、『神の力』は十メートルの距離を空けて対峙する。

しかし、それは少しでも十字教を知る者ならば無謀の一言に変換できた。

別に神裂が弱いとか大天使が強いとか、そんな小さなレベルの話ではない。

もっと根本的に、一番根っここの部分から間違っってしまったている。

大体をもつて、これは人類文化史上ほぼ全ての宗教に当てはまる法則だろうが、人間は、神様には逆らえない。

異なる神に仕える異教者ならともなく、十字教の人間は、同じ十字教の天使には逆らえない。

考えてみれば当たり前の法則だ。

つまり、神裂が教会に属してしまっている時点で、『神の力』には絶対勝てない。

天使少女は一言も告げない。

『神の力』はただ、その背から生える水翼の一本を天高く振り上げた。

羽の先まで『天使の力』を封入した『水翼』は、それ一つが街を壊す『天罰』と言っても良い。

一度振り下ろせばこんな砂浜など吹き飛び、クレーター状にえぐれて湾が出来上がるはずだ。

神話の時代、神々の力が大地を削り地図を整えたように。

『神の力』は迷わない。

青を司る大天使は一瞬も迷わずに、『水翼』を振り下ろした。

水翼は恐るべき速度で神裂火織の頭上へと真っ直ぐに振り下ろされる。

それで終わり。

それで終わりのはずなのに。

スパン！

小気味の良い音と共に、『水翼』が横一閃に切断された。

その光景を、誰が予測できただろうか。

神裂火織の腰に下げられた、二メートル近い刀。

それが引き抜かれた瞬間、巨大な『水翼』が竹筒のように切断された。

それだけではない。

斬り飛ばされた水翼の残骸は一瞬にして、爆風に吹き飛ばされるように粉微塵となり夜の闇へと消えていった。

神裂は、何一つ告げようとしない。

すでにその刀身は黒鞘の中へと静かに収められている。

『神の力』の前髪が、揺れる。

まるで何かの実験のように、背中中の『水翼』を一本振るう。

今度は横一閃、地に立つ者全てを薙ぎ払うとも言わんばかりの暴力の突風が吹き荒れる。

しかし、それすらも。

斬！

神裂火織の一刀は、五十メートルもの長さの水翼を軽々と斬って捨てた。

しかも、それでいて神裂は振り抜いた刀の速度や重さに振り回される事もない。

一瞬前に振り抜いた刀は、一瞬後には鞘の中へと静かに収まっている。

十メートル先にて、神裂火織の指は静かに刀の柄へと触れている。

天使の動きが止まる。

目の前の獲物をどう料理すべきか、慎重に戦術を練り直すように。

「むしろ、私としては」

神裂は、挑発するように、

「この程度で驚かれた方が心外です。どうもあなたは、神裂火織という生き物を過小に評価しすぎてはいませんか？」

『神の力』は答えない。

今度は二本の水翼を左右から、鋏のように同時に交差させる。

轟！

唸りあげて襲いかかる二本の水翼は、しかし、竜巻のように身を回す神裂の一撃にて、二本同時に叩き切られて消滅した。

「……、」

前髪が夜風に揺れる。

一本二本ではなく、合計で四本も断ち切られた。

それは偶然ではなく必然だ。

そして、矛盾も孕んでいる。

十字教徒は十字教の天使には逆らえないはずなのに。

対して、逆に神裂は涼しい顔で、

「そもそも、私をただの十字教徒と見ているのが間違い」

語り出した神裂の言葉を遮るように氷塊が飛んできた。

神裂は『神の力』を見るが、そちらにも氷塊が飛んできていたようだ。

「…… # #。うるせエ！語ンじゃねエ！」

氷塊を飛ばしたのは真琴であった。

戦闘が始まり、二人から空気のように扱われていた真琴は、ついにブチギレてしまい、無差別に攻撃したのだった。

「テメエら、俺を無視して二人でやってンじゃねエぞ！」

「……、」

「……邪魔だけはしないように、と言った筈ですが？」

「ああ？俺からすればテメエが邪魔なんだよオ」

「な、なにを!？」

そういうと、真琴は空間移動を使い神裂を連れていき、自分だけ戻ってきた。

「さてと、ようやく(俺の)邪魔者は消えた。テメエと俺、どっちが強いか殺ろうぜエ?天使さんよオ!!!？」

「……、」

『神の力』はただ黙って『敵』を見据えた。

真琴はただ自分の強さを信じ『神の力』に挑む。

そしてようやく、天使 vs 超能力者 の戦いが此処に始まった。

第十五話 八月二十九日？

ドン！！

強大な怒号。

大天使が真上から振り下ろした五十メートルもの水翼を十メートル先にいる真琴が叩き潰した音だ。

真琴の手にはいつの間にか、槍が存在していた。

その槍は『グングニル』。

北欧の主神オーディンの伝説の槍である。

「ハッ、便利な能力だなア、こりゃあ」

真琴は最近奪った『武具創造』と『操影変幻』の能力を合わせ、『グングニル』を影から出してきたのだった。

『武具創造』

武器、防具を造り出す能力である。

しかし、知識が必要。

知識が無ければ造り出す事は出来ない。

真琴は学習装置によって色々な知識を詰め込まれているので、どんな武器、防具でも造り出す事が出来る。

『操影変幻』

影を変幻自在に操る能力である。

影の形を変えて攻撃、防御する事も出来るが、真琴は収納として使っている。

だが、『神の力』は動じない。

潰された水翼などいくらでも補修できるからだ。今度は左から横殴りに水翼を振るう。

これも真琴は叩き潰すが、今度はその背を狙うように右から水翼の横一闪。

『神の力』と真琴の間にはまだ距離があるが、天使は真琴を近づけまいとするように水翼の乱撃を繰り返して来る。

背後を襲う水翼を、真琴は体ごと回転するように、振り返り遠心力を乗せ叩き潰す。

その瞬間を狙ったかのように、神の使いは真上から時間差を空けて三本の水翼を振り下ろす。

斬！

三本の水翼の内、最初の一本を真琴は槍で叩き潰す。

しかし、槍では次に間に合わない。

「チッ」

瞬時に真琴は『グングニル』を手離れた。

だが、影から武器を抜く時間はない。

真琴は瞬時に造り出す。

真琴の手に現れたのは『カリバーン』だった。

二本目の水翼をその剣で迎撃しようとするが、水翼はひとりでに砕け散った。

細かいガラスの破片のようになった数千もの『刃片』が、真琴目がけて襲いかかる。

真琴はとっさに『刃の豪雨』へ対応しようとした瞬間、さらに意表を突いて三本目の水翼が『刃の豪雨』を蹴散らすように追い抜いた。

「……うっ……ゼエー！」

不意打ちの三本目は両断するが、続いて真琴に迫る『刃の豪雨』が迎撃出来ない。

またも真琴は『カリバーン』を手離し、新たに造り出す。

真琴の目の前に七枚の花が咲く。

造り出された『ロー・アイアス』が『刃の豪雨』を防ぎきった。  
戦局はここから本格的に動き出した。

再び『カリバーン』を取り出した真琴は、天使に向けて歩き出す。

ドガガガザザザギギ！！

近づく真琴に、天使は近づけまいと水翼を放つが、真琴は『カリバーン』で迎撃する。

一秒に四五発もの斬断の火花が炸裂した。

その後も真琴に休みを与えまいとして、数十本もの水翼を別々の生き物のように動かして、様々な角度と方向と時間差を使って真琴に襲い掛かる。

が、全て真琴は叩き斬った。

そして一瞬、水翼が途切れた。

それを真琴は見逃さない。

その一瞬だけ『カリバーン』を宙に浮かせ、再び『グングニル』を数本取り出す。

取り出した『グングニル』を真琴は天使に向けて放り投げた。

天使は迫りくる『グングニル』を辛うじて迎撃するが、その間に真琴の接近を許してしまった。

咄嗟に、水翼を真琴の逃げ道を塞ぐように放つが、それをも真琴は全て迎撃する。

避ける事はない。

避ければ衝撃波のような轟音と共に辺りの砂が勢い良く意欲巻き上げられ、視界を奪われると分かっているからだ。

真琴は勢いそのまま、拳を天使に向けて放った。

その時、遠くの方で白光が夜空へと溢れ出した。

瞬間、赤いシスターに宿っていた『天使の力』が霧散した。

『天使の力』が無くなったという事は、『御使墮し』は解決したという事だ。

『天使の力』が霧散した事に気づいた真琴は、拳を体ごと向きを変え、拳は海に突き刺さった。

『向き』によって、真琴と赤いシスターの回りの海水が吹き上がる。

海水によって真琴と赤いシスターがびしょ濡れになる中、

「…ふっ…ざけんじゃねエッ！！」

真琴の叫びが響き渡った。

真琴の戦いは不完全燃焼で終わるのだった。

第十六話 八月三十日（前書き）

真琴が学校に通うかどうか募集中。

何処の学校に通うかも一緒に添えて頂けると嬉しいです。

## 第十六話 八月三十日

『御使墮し』が解決した翌日、真琴は学園都市内の廃墟に拉致されていた。

「お土産っ、お土産っ、うっれっいなあ〜」

「超お土産下さい」

「……##」

「……」

その廃墟には真琴の目の前で小躍りするフレンドと、片手を真琴に突き出す絹旗、あまりのウザさに怒りに震える真琴、無言で手を出している滝壺がいた。

何故こんな状況になっているのだろうか……。

昨日、不完全燃焼だった真琴は事件が解決するとすぐさま学園都市へと戻った。

学園都市に戻った真琴は、目に付いた犯罪など片っ端から潰し、憂さを晴らしていた。

しかし、思ったより晴れず、夜中、寮に帰ってきた真琴はそのまま不貞寝を始めた。

だが真琴はこの日、朝に起こされた。

「起きなさい！」

「……」

一瞬起きるものの、すぐさま二度寝に入ろうとするが、美琴に起こされる。

「真琴、朝食の時間だから起きなさいよ」

「……、今日はいりません。お姉ちゃんだけでどうぞ」

と、真琴は寝始めた。

お昼頃まで寝ていた真琴は、お腹に何か入れようと外へと出た。だが、タイミングよく電話が鳴る。

フレンドからの電話だったが、真琴は無視して目に付いたファミレスに入った。

ファミレスで適当に注文した真琴だが、料理が運ばれてくるのを待っている間に『アイテム』のメンバーに見つかり、料理を食べる事が出来ずに廃墟へと拉致された。

フレンドに、

「何か仕事ですか？」

と聞くと、フレンドは、

「お土産ちょうだい」

と笑顔で踊り出した。

そして冒頭に戻る。

「……………#、土産なんぞあるかアア！！こっちは仕事で行ってんだアアア！」

真琴は遂にキレた。

「「えー」」

フレンドと絹旗がハモった。

「超有り得ないですけど…」

「ほんとほんと…」

「…コイツラ、マジ殺す！」

絹旗とフレンドの言い草に真琴は立ち上がり、逃げる絹旗とフレンド、追う真琴という追いかっこが始まった。

フレндаと絹旗にお仕置きをした真琴は、廃墟を出てご飯を食べる為に、先程とは別のファミレスへと向かうのだった。

「よ！御坂……妹、昨日はサンキュな」

ファミレスへと向かった真琴は、途中で上条当麻に遭遇した。

「…僕は男です。後名前…忘れたんですか…？」

途中で一瞬止まった上条に、真琴はジト目で問う。

「あ、えくと、…ごめん」

「真琴です」

上条はバツの悪そうに言う。

「あー真琴、お詫びに飯ぐらい奢るぞ？」

「本当ですか!？」

「あ、ああ」

上条の奢るといふ言葉に真琴は食いついた。

真琴の食いつき様に、上条は若干引いたがすぐに腕を掴まれてしまった。

真琴はそのまま上条を引き連れて、ファミレスへと入る。

朝、何も食べておらず、昼も何だかんだで食べる事の出来なかった

真琴は、奢りなので気にせず注文していった。

「……不幸だああ」

真琴が注文した量に、上条は財布を気にしながら、小さな溜め息を吐きながら呟くのだった。

第十七話 八月三十一日？（前書き）

五巻突入！。

学校をどうするかはまだまだ募集中。

よろしく願います。

## 第十七話 八月三十一日？

深夜の路地裏には、怒号と絶叫と悲鳴と何かが壊れる音が炸裂していた。

コンクリートとコンクリートに阻まれた、細長い直線のような場所だった。

おそらく両サイドを阻んでいるのは学生寮だろう。

そこで七人ぐらいの少年が息を巻いている。

さらに視線を下に向ければ、地面には三人ほどの人間が血を流して倒れていた。

七人の少年達の手にはジャックナイフや警棒、催涙スプレーなどが握られている。

破壊力は抜群だが使い慣れている感はなく、ビニール包装を解いたばかりの新品ですという印象は拭えないが、それが殺人にも使える得物である事に間違いはない。

いや、むしろ素人が威力も分からずに振り回すというのも、それはそれで別種の危険を孕んでいると言っても良い。

七人の少年達はたった一人の人間を取り囲んでいた。

彼らの目は皆、血走っていた。

それでも、取り囲まれているたった一人の人間は、動じない。

むしろ、自分を取り囲んでいる凶器持ちの七人の事が視界に入っていないかのように、細く切り取られた夜空を見上げながら何かを思索しているようにも見える。

コンビニに行った帰りなのか、店名の入ったビニール袋をブラブラと揺らしている。

中身はどうやら缶コーヒーらしく、十本以上の缶が袋を内側から押していた。

彼は白く、白く、白く、白い印象を持つ少年。

それ以上に、学園都市元最強の超能力者というイメージを見る者へ

凶悪に叩きつける。

ふと思う。

あの現最強である『究極闘法』は今何しているのだろうか。  
一方通行と呼ばれる人間は、ぼんやりと思考する。

おオあ！

という背後からの絶叫。

一方通行を取り囲む凶人達の一人が、ナイフを手に彼の背中へ突っ込む。

だが、一方通行は振り向きもしない。

視線すら向けない。

その無防備で華奢にすら見える背中に、凶人は体ごと突っ込むような形で全体重を乗せたナイフの先端を突き入れる。

二万人の妹達を使用した絶対能力への進化『実験』。

その末路。

彼の敗北は、世界に対してどのような変化を与えたのか。

ボギン

骨の折れる音が一方通行の背中から響いた。

もちろん、それは一方通行の体が壊れた音ではない。

彼の背中をナイフで刺そうとした凶人の手首が折れたのだ。

ナイフにかかる全体重を乗せた力の『向き』を反射された事で、ナイフを握る細い手首の方が強度的に耐えられなかったために。

ぎゃああー！！

凶人の新たな絶叫。

手首を押さえてゴロゴロと汚い地面を転がる光景は、滑稽だった。

少年はあの時から、『学園都市最強』ではなくなった。

彼が学園都市で、今では八人になった超能力者である事も、その『皮膚上に触れた運動量・熱量・電気量その他あらゆる力のベクトルを自在に変更できる』能力にも何ら変化はないのに。

仲間の絶叫に誘爆するように、残り六人の少年達が一斉に襲いかかる。

しかし、真の意味で『勝てる』と思って戦っている者は、何人いるのか。

彼らの目は確かに血走っていた。

だが、それは度を越した緊張や不安、恐怖や焦燥によるもののようにも見えた。

あの一戦を境に、彼は昼夜を問わず多くの者に襲撃されるようになった。

次々と雄叫びを上げて振るわれるナイフや警棒に、しかし一方通行は視線も向けない。

だらりと両手は下げたままだ。

彼は何もしなくても、自滅を待つだけで良い。

凶人達は自らが振るった攻撃の全ベクトルを、複雑でもろい手首の骨へと集中的に『反射』される。

だが、そういった者達はたった一人の例外もなく、即座に気づく。初撃を放ち、それが失敗した時点で。

学園都市元最強は、健在であるという事に。

凶人達の骨の碎ける音が連続して響く。

絶叫してのた打ち回る彼らを、やはり一方通行は無視した。体術に訴えるのは危険と感じたのか、それまではなけなしの良心でもあったのか。

今さらになつて『能力』を使おうとする者が現れる。

それでも襲撃は終わらない。

何度潰しても何度叩いても何度証明しても、バカどもが貼ったレツテルは剥がれない。

それが何の能力者であるか、一方通行には良く分からなかった。

何だか良く分からない力が発せられて、何だか良く分からない力が『反射』しただけ。

ポカンとした能力者の男は、直後に自分が放った自信満々の一撃をその身に受けて地面に転がった。

死ななかつた所を見ると、せいぜい異能力止まりといった所だろう。

さて、と。

彼は思案する。

妹達、超電磁砲が関わったあの一戦を境に、一方通行の何が変わったと言ふのだろう？

一方通行は弱くなつたのか、強くなつたのか。

それとも、あの『究極闘法』は何処まで高みに昇っているのか。

「あん？」

ふと自分を取り囲む喧騒が沈黙している事に気づき、一方通行はようやく路地に切り取られた夜空から周囲に目をやった。

一方通行を勝手に取り囲んだ凶人達は、これまた勝手に自滅して汚い地面の上ののびていた。

のびていた、と穏便な言葉で表現するには辺りに血が飛び散り過ぎていたが、少なくとも死者はない。

一方通行と正面から渡り合ったのだ。

呼吸できるだけでも奇跡と呼んで差し支えない。後ろを振り返れば十人ほどの凶人達が倒れていたが、しかし一方通行が何かをした訳でもないし、彼はこれを『戦闘』とすら感じ取っていないかった。

深夜にコンビニへ行き、缶コーヒーを買って帰る途中だった…彼にとっては、その程度の認識しかない。

路上に倒れる者達にトドメを刺そうとも思わなかった。

今日殺せる者は明日殺せるし、明日殺せる者は一年後にだって殺せる。

ムキになるのが馬鹿らしかった。

あの『実験』と違い、躍りになった所でゴールもない。

「あー、違うよなア。牙向いた馬鹿を見逃すなんて俺の人格じゃねエよ。やっぱ何かが変わったんだ。でも何が変わったんだア？何なんだこりゃ、なーんなーんでーすかー？」

一方通行は首をひねった。

勝ち負けの混在する勝負を知ったせいで一方的な圧勝に満足できなくなっただけ…という意見は些か美化し過ぎだろう。

というより、自分が痛めつけられる場面を笑って思い出す人間がいたら、そいつは本物のマゾだ。

うーん、と一方通行は腕を組み前を向く。

と、そこには『究極闘法』が佇んでいた。

「デメエツ！」

「お前はコーヒー大好き人間ですかア？」

目の前に現れた真琴に一方通行は戦闘体勢になるが、真琴は気にせず一方通行の手にあるコンビニ袋を見て呆れる。

そのまま一方通行との睨み合いになるかと思いきや、

「…おい、後ろに何かいんぞ？」

「あア？」

真琴は一方通行の背後に奇妙な人間がいるのに気が付いた。

奇妙な人間は、格好からおかしかった。頭から汚い毛布を被っているだけである。

どこその秘密結社のマントのように明るい空色の毛布で頭も体もすっぽりと隠していて、その人物の性別すらも判別できない。その下にどんな服を着ているのかも分からない。

その上、身長が極端に低かった。

決して大柄ではない一方通行の腹ぐらいの高さしかない。

十歳前後の少年か少女だろう、おそらく。

平均的なホームレスに比べて、明らかに幼すぎる。

もともと、この学園都市の住人の八割は学生なのだから、全く例がないという訳でもないが。

そのチビ毛布は一方通行に向かって何かを叫んでいた。

一方通行は全神経を真琴に向けていた為、背後の人物に気づくのが遅れた。

「……いやーなんというかここまで完全完璧無反応だとむしろ清々しいというかでも悪意を持って無視しているにしては歩いているペーとか普通っぽいしこれはもしかして究極の天然さんなのかなーってミサカはミサカは首を傾げてみたり」

「ミサカ？」

真琴も首を傾げる。

その少女は一方通行からほんの十センチの距離に立っていた。

一方通行はわずかに顔をしかめた。

彼の能力は『あらゆる向きを変換する』モノであって、つまりどれだけ近くに寄っても、直接突つかからない限りはダメージを与えない。

『反射』はあくまで『反射』であって、それは害意持つ者にしか牙を向かない。

最初から害意のない者だけは、決して傷つけない。

「……、くっだらねエ。オイ、場所を帰ンぞ」

「……あれは良いのかよオ？」

「ブツクサ言ってる間にどんどん距離が開いていくんだけどミサカの事は見えてないの妖精さん扱いなのほらミサカはここにいるよー、ってミサカはミサカは自己の存在を激しくアピールしているのに存在全否定？」

一方通行は首を鳴らしながら、真琴を連れて歩いて行く。  
と、置いてきぼりをくらった少女は少し慌てたように、

「おーい、だからミサカはミサカはここにいるんだって…あれ、ひよっとしてなかった事にされてる？ってミサカはミサカはミサカの首をミサカらしく傾げて…む？今、何回ミサカって言ったっけ、ってミサカはミサカは思考の泥沼にはまってみる」

「待て。……、ミサカだと？」

一方通行の足がピタリと止まる。

何が嬉しいのか、それだけで毛布少女は小走りになって追い着いてきた。

「おおつ、ようやくミサカが存在が認められたよわーい、ってミサカはミサカは自画自賛してみたり。我思う故に我ありなんて言葉は嘘っぱちなねやっぱり主観だけでなく客観で何者かに存在を認めてもらわない限り自己なんてありえないね、ってミサカはミサカは間違った知ったかぶり知識でコギト「エルゴ」スムを全否定してみる」  
「ちよつと待てコラ今すぐ黙れ。オマエその頭から被ってる毛布取っ払って顔見せてみる」

「つて、え？えと、えつと、えーつと、まさかこんな往来で女性に衣服を脱げというのは些か大胆が過ぎるといっつか要求として無茶があるといっつか…つて、あのー、ミサカはミサカは尋ねてみるけど。  
ほんき？」

「……、」

「わあ黙った。本気と書いてマジと読む目だよこの人つてやめて毛布を引つ張らないで。この下はちよつと色々まずいんだからってミサカはミサカは言ってるのにぎゃああ！？」

最後だけ平淡な口調ではなくなったが、それでどうにかなる訳でも

ない。

「お前らアホか……」

二人のやり取りに真琴は呆れた。

真琴が呆れる中、彼女の頭の上に被さっていた毛布は下へ下へと落ちていく。

……まず始めに見えたねが顔。

一方通行と真琴の良く知る量産型電撃使い『妹達』と全く同じモノ。ただし、『妹達』の年齢設定が十四歳であったのに対し、目の前の少女の顔つきは十歳前後しかない。

何かびつくりしていたように大きく目を開いていた。

こちらへんも、やはり妹達らしくない。

……次に見えたのが肩。

素肌が露出するデザインの衣服を着ているのか、やはり体つきは十歳前後のものらしく、浮き出た鎖骨などは触れただけで折れそうな繊細さを垣間見せている。

……さらに見えたのが裸の胸。

……そして見えたのが裸の腹。

……最後に見えたのが裸の足。

「ああ？何だこりゃあ、……ってか何だアそりゃあ!？」

毛布を掴んだままの一方通行の顔が思わず引きつった。

彼の人となりを知る人物がこの光景を見ていたら、悪寒と共に笑い転げていたかもしれない。

いや、いた……。

真琴が一方通行の肩に手を乗せる。

「じゃあな……変態」

「ッ!? テ、テメエ!」

真琴は空間移動を用いて混沌になった空間から離脱した。

結論だけ言えば、完全無欠に素っ裸の少女と一方通行という名の変態が取り残されたのだった。

## 第十八話 八月三十一日？

二百三十万人もの学生を抱える超能力開発機関『学園都市』の中でも、常盤台中学は五本の指に入ると言われる名門の女子学園である。生徒数二百人以下という少人数制を採用し、現在も超能力者を二人、大能力者を四十七人も抱えている。

ちなみに常盤台中学の在学条件の一つは『強能力者以上』だ。そんな常盤台中学女子寮の朝は、夏休みでも生活リズムは変わらない。い。

午前七時起床、以後三十分以内に身だしなみを『見苦しくない程度』に整え、午前七時三十分には食堂へ集合、点呼を取ってから午前八時までに食事を完了させる。

ちなみにに食事終了が午前八時と遅いのは、常盤台中学は学バスの使用を推奨しているからだ。

遅刻の門限は午前八時二十分なので、バスを使わなければ街中を全力で走り回る事になる。

今日は八月三十一日で、まだ夏休みなので午前八時以降のスケジュールは夕食と門限と消灯を除けば自由となる。

世間では宿題に追われてドタバタするのが定例らしいが、常盤台にはそういった慌しい空気は感じられなかった。

やたらだだっ広く荘厳な食堂の座席で超能力者の一人、御坂美琴は両手を広げて大きく伸びをしていた。

服装は夏休みでも制服だった。

常盤台のルールでは、寮も学校の一部なので私服は禁止との事。しかし、辺りを見ると真琴だけ私服だった。

真琴の場合はまだ何処の中学にも在籍していないだけなのだが、それよりも真琴が朝に起きて食堂にいるという事が珍しい。

「（マンガ、マンガ……。あっ、そうだ今日は月曜じゃない）」

美琴は何かに気づいて席から立った。  
毎週月曜日と水曜日はコンビニでマンガ雑誌を立ち読みする日である。

普段なら立ち読みは放課後に行くが、今は夏休みなので朝から立ち読みができる。

美琴としては密室ばかり出てくる推理マンガの犯人が気になって仕方ないので一刻も早く読みたかった。

そんなこんなでコンビニへ出かけようとする美琴に、食器類を片付けていたメイド服姿の給仕が勸付いた。

彼女は他校の家政学校の生徒で、実習と称して女子寮の中で働いている中学生だ。

「みさかみさかー、これからコンビニか本屋にでも出かけるのかー？」

「今日は十日じゃないし月曜だからコンビニよ。あと土御門、一応アンタはメイドさん見習いなんだからタメ口はまずいでしょ？」

「みさかみさかー、コンビニ行くならいかがわしいマンガ買ってきてほしー。あれだよあれー、少女向けで十八禁ではないものの妙になまめかしいヤツー」

「…………あのメイドは変態さんですか…………？」

少し離れた席でのんびりしていた真琴は、姉とメイドの会話を聞いてしまい呆れた。

やがてメイドとの会話が終わったのか、美琴は食堂を出た。

やけに長い廊下を歩いて玄関へ向かい、玄関ホールに辿り着くと、そのまま玄関の大きな扉を開け放った。

石造りの洋館みたいな学生寮のすぐ正面に、二十四時間営業のコンビニがある。

美琴はそのギャップに小さく笑って、歩道へ一歩踏み出した所で……ふと横合いから男に声をかけられた。

「あつ、何だ御坂さんじゃないですか。おはようございます。これからどちらへ？あれ、部活とかかって入ってましたっけ。自分もよろしければご一緒しても構いませんか？」

美琴は一瞬硬直してから、何かものすごく苦手なものを前にした顔を必死に押し殺しつつ声の飛んできた方を振り返る。

美琴より一つ年上の、背の高い男が立っていた。

海原光貴。

美琴が苦手とする人間の一人だった。

彼は常盤台中学の理事長の孫だったりする。

もともと美琴が海原を苦手としているのは、彼が権力を振りかざす人間……だからではない。

「うん、部活に入っていないのなら趣味に没頭するのも良いですよ。御坂さんはスポーツとかやりますか？テニスに乗馬にスカッシュにゴルフ、この辺りなら自分でも教えられますから興味があれば言ってくださいね……って、あれ？どうしたんですか、気分でも優れませんか？」

「あー、いや、何でもないわ」

本気で人を心配するような海原の口調に、美琴は小さく息を吐く。海原光貴は自分の権力がどれだけ絶大な効果を発揮するか知っていないながら、決してそれを振るおうとはしない。

彼はいつも意図的に美琴の高さに視線を合わせてから、対等な立場で話しかけてくる。

美琴からするとその冷静に距離を測る『大人』な部分がかえって肌に合わないのだが、かと言って相手が『大人』として接してきている以上、彼をどこぞの高校生に接するようにビリビリで対処するのは、自分がひどく子供のように見えてしまっただめられる。

美琴が海原に何となく苦手意識を抱いているのは、四六時中気を遣わなければならぬからだ。

友達と接しているというより、部活の先輩の機嫌を取っているような気分になるのだ。

「御坂さん？」

話しかけられた美琴は思わず仰け反る。

考え事をしている内に海原が急接近していて、あまつさえ下から顔を覗き込まれた。

「あの、考え事していないで。これからどこかへ行くんでしよう？」

「え、えーっと……（正直に言うと私は立ち読みだろうが何だろうがマンガを読めば容赦なく笑い出してしまふ人間なのでできれば立ち読みの時に隣に知り合いが立っているのは勘弁願いたいというか白井黒子とかあのバカなら問題ないんだけど……、さすがに真琴は無理）」

「はい？」

「いや別に！何でもない何でもない！心の声とか口から出てないわよ！」

「????特に急ぎの用事ではないんですか？ああ、それならどうでしょう。近所に魚料理が美味しいお店があるのですが、お暇でしたら是非」

「……（朝食の直後に食事に誘うんかいコイツは……）」  
と、美琴は思うが顔には出さない。

そんなやり取りを寮の目の前で繰り広げる美琴達を、真琴は寮の窓から見守っていた。

「今すぐ降りてきて、この男から逃げるのに協力しなさい！」

すると、突如美琴が視線を左右に走らせたと思ったら、真琴に気づいたのか目が鋭くなり幻聴が聞こえてきた。

真琴は聞こえる筈がないと頭を振るが、瞬間、美琴からの視線が先程よりも鋭いものに変わった気がして、さっきの声は幻聴ではないという事を知るのだった。

「はあ……」

真琴はため息を吐き、美琴の願いを叶える為、空間移動で少し離れた場所に移動するが、すぐ近くに上条当麻を発見した為これ幸いと、

美琴の事は上条当麻に丸投げし街へと遊びに出かけるのだった。

後に、美琴に遭遇し説教が待っているのだが、真琴はまだ知らない。

第十九話 八月三十一日？

走る。

とにかく走る。

「ちくしょう、何がどうなっただんだ!？」

「知るかア、とつとと走らねエと死ぬぞ？」

「…何で真琴はそんなに冷静なんだ!？」

上条当麻と御坂真琴は路地裏を走っていた。

その後ろには正体不明の敵が追ってきている。

幸い、敵の攻撃は連射性や正確性に乏しいものらしい。

それでも絶えず飛び道具に背中に狙われている状況というのは、上条にとって凄まじいプレッシャーだった。

だが、真琴にとっては憂鬱な状況である。

真琴にとって不幸の始まりは上条当麻に美琴を丸投げした事から始まったのかもしれない。

真琴は上条当麻に姉である美琴の事を丸投げした後、本屋へと向かっていた。

能力理論の本と神話と伝説の本を探す予定であった。

学習装置によって知識は持っているが、もっと専門的な知識を付けても決して損にはならない。

しかし、真琴は本屋に辿り着く事はなかった。

「みーつけたあ」

突如背後に現れた麦野によって、真琴の予定は大きく変わった。

麦野に連れられて真琴はブティックに来ていた。

手持ち無沙汰な真琴は麦野に腕を組まされていた。

「真琴。どれが似合ってる？」

「……真ン中」

「そう？じゃあ、これちょうだい」

麦野にとってはちよっとしたデート気分なのか、真琴に3つの服の中から選ばせる。

だが、真琴にとってはかなり不本意な買い物の為、性格が戦闘モードに入っており不機嫌であった。

それでも真琴が渋々ではあるが選んだ服を、麦野はとても嬉しそうに買う。

暫くしてから二人は店を出た。

「真琴。次何処行く？」

「…何処でも」

「それじゃあ、あそこの喫茶店にでも入りましょう」

麦野に言われるまま喫茶店へと入る。

少しお茶したただけなのだが、麦野はそれで満足したらしく、真琴はそこで麦野と別れた。

因みに麦野は乙女の表情を浮かべ帰って行った。

真琴は今度こそ本屋に行こうと歩き始めたが、ファーストフード店の前を通った事によってその思惑も断念せざる終えなかった。

ファーストフード店の前には海原光貴と上条当麻がいた。

そのまま海原に捕まった真琴は、会話に興じる事になった。

上条当麻がファーストフード店に入って行く海原のそっくりさんを

見つけてしまうまでは…。

「なあ。お前って兄弟とかいるのか？」

「いえ。自分の家は一人っ子ですけど。それがどうかしたんですか？」

「いや……さつきそこに、お前と良く似たヤツが店ん中に入っていたからさ」

上条がファーストフード店の方を指差すと、海原はぎょっとしたようにもう一度振り返る。

「は、はあ。自分は見えていないんで釈然としませんが、チラッと見た程度でしょうか？髪や服が似ていたとか、そんな話ではないんですか？」

海原はやや気味悪そうに上条と店の方を交互に眺めてから、

「あの、それは本当に自分と良く似ていた人なんですか？」

「え？ま、まあ。似てたっつーか瓜二つだった……ように見えたけど。でも他人の空似なんだろ。そんなに気にする事はねーんじゃねーの？」

「その似ている人が、御坂さんがいるお店の中に入って行ったんでしょう？それって結構不気味じゃありませんか」

海原は心配するような顔でファーストフード店の入口へ目を向ける。

「肉体変化という能力者もいますよ、この街には。その名の通り、自分の顔や体を他の人のものに組み替える能力です。もっとも、遺伝子レベルでの変化は不可能らしいですけど」

「肉体変化……ねエ……」

ややイライラしたように言う海原を見て、真琴もイライラし出す。

上条に至っては少し心配性過ぎるかもしれない、と考えていた。

「ま、空似にしても何にしても、行って確かめりゃ分かるだろ。おそらく心配するだけ損だとは思っけどな、杞憂ならさっさと晴らしちまおうぜ」

さっさと先へ進もうとする上条と真琴に、しかし海原は反対に一步退いた。

「あん？」

「あ、いえ……。自分は先程も御坂さんを怒らせていますし。もし自分の杞憂だというのなら、それだけの事で今の御坂さんと鉢合わせになるのも、それはそれで怖いです」

「チツ、結局テーマエはそんなだけの器かよ……」

そんな海原に真琴は呆れたように呟いた。

それは誰にも分からないような小さな声だった。

「何を寂しげに笑ってんだか。別にそんなだけアイツの事を心配してたっただけだろ」

「お世話とお節介は別物ですよ。すみません、もしよろしければお店の方へ行つて異常がないか確かめてきてくれませんか？」

「ったく分かったよ。行くか、真琴。けどさ。別にこんな事言える義理もねーんだけど、ここまでできて弱腰になる必要はねーんじゃねーの？この一週間だって誘いを断られても諦めなかつたんだろ」

「はあ。何をですか？」

「え、だから……」

「自分はこの一週間ほど部活の合宿に出かけていましたよ。何となく避けられているのは分かっていましたし、一度熱を冷まして仕切り直した方が良くとも考えていましたし。今日は夏休みも最後の日だということで、久しぶりに御坂さんに会ってみたかつたんですけど」

上条はギクリとした。

しかし、上条はそれを顔に出さないように真琴を連れ彼の横を通り過ぎてファーストフード店へ向かおうとする。

が、すぐ後ろから、ふと海原光貴の声が聞こえてきた。

「まったく、上手くいかないものですね。人を騙すって」

ドッ……！

上条は背中の中の真ん中の辺りに強烈な衝撃を受けた。

それが拳による一撃だと気づくのに数秒もかかった。

その数秒の間に真琴が迎撃に移るが、

ゾンー！！

真琴と上条の間へ、見えない何かが通過した。

『海原光貴』が手に持つ黒い石の刃物を天にかざしたただけであったが、刃物の刃から飛び出した見えないレーザーのようなものが、二人の背後にある違法駐車車の自動車に直撃した。まるで焼印か何かのように、自動車のドアに複雑な印が刻まれている。

ぐずり

刻まれた溝から見えない何かが噴き出した。

一秒の空白の後。

ゴングン！

轟音と共に、自動車のドアからガラスからシャーシからタイヤから、あらゆる部品がバラバラに分解された。

大雑把に切断されたり引き千切られたりといった『破壊』とは違う。あらゆる部品と部品の結合部分が綺麗に外れて『分解』されているのだ。

彼は続けて刃物を振るおうとする。

「！？」

「チッ！」

辺りにはたくさんの方がいる。

彼らは目の前で自動車が分解された事に驚いているが、それが何者かの攻撃によるものだと気づいていない。

そして海原は周りの被害など考えてもいない。

こんな状況で魔術師が暴れば、流れ弾が彼らを傷つける事は明白だった。

「くそ！」

上条は危険を承知で海原に背を向けた。

とにかく人のいない所へ向かうため、真琴を引きずって大通りから脇道へと飛び込む。

入り組んだ裏路地を走る。

そして冒頭へと戻る。

上条は携帯電話を取り出した。

誰かと電話しただしたが敵の攻撃は止まらない。

ゾン！！

凄まじい音でエアコンの室外機などをバラバラに分解させていく。

上条と真琴は路地の角を勢い良く曲がる。

が、思ったより裏路地は短く、真琴達は大通りへ出てしまった。

そのまま急いで道の向かいの裏路地へと飛び込む。

ゾンザン！！

背後で凄まじい音が響き渡る。

真琴達は路地の角を勢い良く曲がる。

「くそっ！」

そこで舌打ちした。

ビルの工事中で通行止めになっていたのだ。

狭い路地にシャベルやセメント袋や建築機材が占拠していて、とてもまともに通れそうにない。

作りかけの屋上部分にはクレーンでも設置されているのか、巨大な

アームが頭上に覆い被さっている。

それでも真琴達は工事現場へと走りつつ、背後を振り返った。

自分が曲がってきた角から、着実に『敵』の足音が近づいてくる。

上条が周囲に目を走らせた瞬間、曲がり角から『海原光貴』が飛び出してきた。

真琴達の姿を見つけるなり、彼はその手の中にある黒い石の刃物を振り上げ、角度を定める。

「ハツ。覚悟してください!!」

角度が決定する。

金星と鏡と標的を接続する。

魔力を注ぎ呪を紡ぎ、星の光を見えざる槍に変貌させて一直線に『敵』を貫き通す!!

初めの標的は上条に決まったようだ。

上条は、その右手を前へ突き出したが、右手だけでは見えない攻撃を捉え切れない。

そこに真琴が上条の前へと躍り出た。

光は確かに真琴へと直撃するが、自身の能力によって無効化させる。

「な……?」

「ハツ! こんなモンかよオ!」

『海原光貴』は思わず声を出した。

その一瞬の隙を上条は見逃さなかった。

上条はすでに『海原光貴』の懐へと深く飛び込んでいた。

「!?!」

ゴン!!

鈍い音が炸裂して、殴り飛ばされた『海原光貴』の手から、黒曜石のナイフがすっば抜けた。

上条は路上に倒れ込んだ『海原光貴』を見下ろした。

真琴は興味無さそうにその場に座り込んでいた。

「さあつて、答えてもらおうぜ」

上条は肩で荒い息を吐きながら、

「どうして『海原光貴』なんかに化けようと考えた？」

「ハッ、あなたは一から十まで説明しなければ理解ができないんですか？」

「できるかよ！『海原』は俺を襲う上で何の役にも立たねえだろ。

なのにどうして『海原光貴』を狙った！御坂に近づいたためか？テメ

エは俺の知り合いってだけの理由でアイツまで狙おうとしたのかよ！？」

自分の姉の話が出てきたため、真琴は上条と海原の会話に耳を傾けた。

「……」

「答える、お前は『海原』の皮膚を剥いで変装してるんだつてな。

テメエは御坂にも同じ事をするつもりだったのか！？御坂は魔術世界とは関係ねえだろうが、何でテメエみてえな魔術師が絡んでくるんだよ！！」

激昂する上条に対し、海原は静かに言葉を紡ぐ。

「本当はね、海原は殺しておくはずだったんですよ」

ぬるま湯のように感情の起伏がない声で。

「どうにも死の直前……念動力ですか、アレを使って海原は自分の体の動きを分子レベルでガチガチに固めてしまいましてね」

上条は平淡過ぎる海原の声に絶句した。

海原はそんな上条の顔を見ると、わずかに満足したようだった。

声に感情が戻る。

「ここに来た目的、ですつて？この場において最初に出る質問がまさかそんなものだとは」

海原は、心の底から嘲るように喋り出した。

「あなたは、本当に理解していないんですね。自分がどれだけ危険な事をしてしまったのかを」

そこから海原の話は『上条勢力』についてだったので真琴は興味を無くした。

「できうる限りあなた達は最後に回したかったのですが、致し方ありません。『海原光貴』はもう素性が割れてしまいました。今度はあなた達の『顔』をいたたくとしましよつか、ね！」

言つて、魔術師は地面に落ちていた黒曜石の刃物へ飛びついた。路地に倒れ込んだまま身をひねるように『槍』が振るわれる。

しかし無理な体勢で放たれたせいにか、『槍』は上条達とは見当違いの方向へ飛んだらしい。

魔術師は舌打ちしながら立ち上がり、さらに黒曜石のナイフを構えようとする。

が、真琴の方が速い。

即座に剣を数本造り出した真琴は、そのまま魔術師に向けて剣を放つた。

その剣は黒曜石のナイフを打ち抜く。

ガラスの砕けるような音と共に、黒曜石のナイフが粉々に砕け散った。

その間に上条が魔術師の懐へと飛び込んだ。

「チイツー！」

「悠長に待つと思うな、この馬、鹿……ッ！」

言いかけて、上条の声が遮られた。

ガンゴン！

金属を打つような轟音が、上条の頭上から鳴り響いた。

思わず頭上を見上げると、建設途中のビルの鉄骨が崩れる所だった。狙いの外れた『槍』が、すぐ隣のビルに直撃したのだ。

そして『槍』は、物体の構成をバラバラに分解する。

ネジやボルトの外れた太い鉄骨が、今まさに上条達の頭上へ降り注ごうとしていた。

「!？」

上条と魔術師は、互いに距離を取るよう後ろへ飛んだ。その中間地点に、重さ数百キロもある鉄骨が聖剣のように突き立つ。間もなく建設中のビルそのものが雪崩のように崩れ出す。常識的に考えれば逃げ出すべきだ。

だが、真琴に至ってはその場から動く事もしない。

「月並みな台詞で何なんだけどさ……お前とは友達になれると思ってたんだぜ」

「自分は、たったの一度もそんな事を思った試しはありませんでしたよ」

返事は即答。

「残念だよ、いやマジで。お前が御坂について語ってた時のアレも、やっぱりただのニセモノだったって事なんだろ。いや、ここだけはマジで残念だ。……お前を本気でぶん殴らなくちゃならない理由ができちまったからな」

その言葉に、空気が静止する。

「……、ですか」

魔術師は口の中で何かを呟いた。

「ニセモノじゃダメなんですか。ニセモノは、平和を望んじやいけないんですか。ニセモノには、御坂さんを守りたいと思う事さえ許されないんですか」

「あ……？」

「ほう……」

「ええそうですね、自分だってこんな真似はしたくなかった」

間もなく始まる崩壊も気にせず、魔術師は言う。

「『海原』だってね、傷つけたくはなかったんです。だって、それが一番幸せじゃないですか。誰も傷つかない方が良く決まってるじゃないですか。自分は、この街が好きだったんです。一月前、ここに来た時からずっと。たとえこの住人になれなくたって、御坂さんの住んでいるこの世界が、大好きでした。でもね、やるしか

なかつたんですよ。結果が出てしまったから。上条勢力は危険だと『上』が判断してしまつたから。ねえ、分かりますか？自分がどんな気持ちで『海原』と入れ替つたのか。自分がどんな想いで、御坂さんのいるこの世界に傷をつけたか」

魔術師は、歪んだ顔に激情の表情を乗せて、

「分かるはずがない！あなたが全部壊したんだ！あなたがもつと穏便でいてくれたら、問題ナシって報告させてくれたら、それで静かに引き下がれたのに！自分は海原を襲う事も御坂さんを騙す事もなくて済んだのに！確かに、今の自分はあなた達の『敵』です。でもそつなつてしまつたのは誰のせいだ！？」

魔術師の全身から、見えざる殺意が吹き荒れる。

その怒りに呼応するかのように、ビルの最上部が崩れ始めた。

上条は魔術師の目を見た。

崩れ始めたビルなど目も向けずに、言った。

「お前、本当に御坂の事が好きなのか？」

「ええ」

ビルの最上部が無数の鉄骨に姿を変え、バラバラと降り注いでくる。

「お前、御坂のいるこの世界を守りたかつたのか？」

「ええ」

無数の鉄骨はビルの下部へと直撃し、さらに様々な部分が分解していく。

「でも、もう守れませんよ。自分はおなた達の敵になつてしまひました。なりたくなかつたのに、なるしかなかつた。他にどうしろつていうんですか。他に何ができるつていうんですか。映画のヒーローよろしく組織単位の人数相手に一人で戦つて死ぬてもいうんですか。無理ですよ、自分はあなたじゃありませんから。あなたのようなヒーローにはなれないんだから」魔術師は、不思議と淡く弱く笑っているような顔でそう言った。

上条当麻と御坂真琴は理解する。

これが魔術師の本音。

『敵』になりたくなかったのに『敵』にならざる得なくなってしまう男の本音。

世界で一番守りたかったものに手をかけなくてはならなくなってしまったために、心の全てが歪んでしまった男の言葉。

「ハッ、ここから先はアイツに手をかける以外の未来はないってか」それでも上条は全力で戦うと決めた。

ここまで本音をさらした人間を受け流す事など、できるはずがなかった。

「だったら仕方がねえ。殺してやるよ、お前のその幻想を」

ビルの最上部が崩れた事により、巨人の手で上から押し潰すようにビルが圧壊した。

次々と雨のように降り注ぐ鉄骨に、しかし上条も魔術師も頭上など見上げない。

後ろへ逃げ出したりもしない。

ただその拳を握り、お互いの距離を最短でゼロに縮めるべくただ前へと駆け抜ける！

「……ククク」

が、その二人を邪魔するかのよう真琴が乱入した。

「が、アあああ!!」

「ぐ、う……!?!」

まず、魔術師を踵落としの要領で地面に叩きつけ、そのまま突っ込んできた上条を安全圏まで殴り飛ばす。

そして、大量の鉄骨が真琴の頭上へと降り注ぎ、地面が振動した。

だが、誰も鉄骨に押し潰されてはいなかった。

魔術師に至っては自分が生き残っている事がそんなに不思議なのか、しばらく呆然としていた。

「何故あなたは……自分を？」

「さアな。……だが、これだけは言うておく。テメエが好きな女ぐ

らい組織を裏切つてでも守つてみせるよ。例え挫折しそうになつても諦めンじゃねエよ。最後まで足掻いてみせるオ。それでも無理なら俺が手伝つてやるよ！」

それから魔術師は少し考え込んだ。

「守ってもらえますか、彼女を」

やがて、彼は二人に問う。

「いつでも、どこでも誰からも何度でも。このような事になるたびに、まるで都合の良いヒーローのように駆けつけて彼女を守ってくれると、約束してくれますか」

そうして、二人は一言だけ告げると、首を縦に振った。

その後、本屋に行く事もなく真つ直ぐ寮へと戻ってきた真琴は、玄関に辿り着くと驚くべき光景があった。

数十個のダンボールが目の前にあった。

全て真琴宛てで差出人は麦野であった。

中身は全て、能力論理か神話についての本であった。

真琴は麦野に感謝するが本の量に嘆息する。

だが一体、麦野は何処から情報を仕入れているのか、それが真琴にとって一番の謎であった。

第二十話 九月七日？（前書き）

こんな駄文を読んで頂いている皆様、ありがとうございます。

皆様にお知らせがあります。オリキャラを出すかもしれないので、またもや、名前募集させて頂きたいと思います。

名前、性格、あと主な口調などがあれば記載して頂けるととても書きやすい…多分書けると思います（汗

皆様の知恵を、私に貸して頂けると嬉しいです。

よろしく願います。

m ( ) m

## 第二十話 九月七日？

夕暮れ時、僕はお姉ちゃんから一本の連絡があった。今から近くのファミレスに来るように、との事。ファミレスへと向かうと、僕はある人物に出会った。

ピリリリリリッ

真琴が読書をしていると、突如携帯が鳴り出した。

一瞬、『アイテム』の招集かと思ったが、携帯のディスプレイには『美琴』と表示されていた。

真琴は電話に出るが、

「真琴。今から近くのファミレスまで来なさい。とにかく急いで！」と、一方的に用件だけ伝えられて切られたのだった。

仕方なく、真琴は寮を出て近くのファミレスへと向かった。

真琴がファミレスに行くと、そこには美琴と美琴に似た大学生ぐらいの女性が同じ席に座っていた。「真琴、遅いわよ」

美琴は真琴を見つけるとすぐさま声をかけてきた。

「お姉ちゃん、ごめんなさい」

「ま、いいわ。ほら、突っ立ってないで私の隣に座りなさい」と言っつて、美琴は自分の横を叩く。

真琴は言われるがまま、美琴の隣に座った。

「んふーん この子が真琴ちゃんなのねー。本当、美琴ちゃんにそっくりねー。こうして見ると双子みたいねー」

そこで漸く、正面に座っていた美琴に似た女性が口を開いた。

「あ、自己紹介がまだだったわねー。私は御坂美鈴。美琴の母です。よろしくね？今日から真琴ちゃんのパパにもなるのよー」

「はい？お姉ちゃんではなく、ママですか？」

美鈴に言った言葉に、真琴は全くついていけない。

「あらー？美琴ちゃんから何も聞いてないのーん？全く、美琴ちゃんたら説明してあげなくちゃ駄目じゃない。昔はあんなに可愛かったのにー。今も可愛いんだけどねー」

「お姉ちゃんの昔とは、どんな感じだったのですか？」

「聞きたーい？昔の美琴ちゃんはねー」

美鈴は真琴に聞かせようとするが、

「うるさい黙れ。アンタはそんな事しに来た訳じゃないでしょー！」

美琴によって遮られた。

「真琴ちゃん、美琴ちゃんが怖ーい」

美鈴は目元を潤ませる。

「…アンタねえ#」

美琴が怒りに震えるが、

「まあ、冗談はこれぐらいにして、真琴ちゃんは学校には通わないのーん？」

「はあ…」

「学校ですか？」

美鈴が真顔になったため、美琴は怒りを何処にぶつければ良いのかわからなくなり、ため息を吐き出した。

対する真琴は、美鈴に学校をどうするか聞かれ困惑する。

「ですが、迷惑がかかりますので…」

「迷惑だなんて、真琴ちゃんはもう私の息子なんだから良いのよー。でも真琴ちゃんに常盤台は無理かなー。でも面白そうねー。一回話だけしてみるわねー」

「いや、あの…」

「ちよつとアンタ何言ってるの！」

美鈴の発言に真琴は困惑し、美琴は怒る。

「真琴は常盤台に通うの！」

「お姉ちゃんは何を言ってる…」

美琴の発言によって、真琴はまたも困惑する事になった。

「んふーん そうー？美琴ちゃんたら過保護ねー。まあ、美琴ちゃんがそう言うなら常盤台に話をつけて来るわねー」

「いや、あの…、僕は男なんです…」

「そんな事は些細な事よねー？」

「そうよ。些細な事よ」

美鈴と美琴によって真琴の意見は却下され、男なのに常盤台に通う事が決定的になった瞬間だった。

「それじゃ、ママは常盤台に話を通してくるわねー。大丈夫よ、真琴ちゃん。問題無く許可される筈だから、またあとで会いましょう」  
それだけ言うと、美鈴は常盤台中学へと向かった。

真琴達がそんなやり取りをしていた、それと同時刻。

「ククク、ワアハハハハ。私は天才だあああ！」

学園都市のある研究所内で、一人の研究者が大声で笑っていた。

男の前には、数多くの実験体の死体が転がっていた。

だが、その内の一体だけは死体ではなく、生きて自身の足で立っている。

実験体は皆、同じ顔と容姿をしていた。

御坂真琴の顔と容姿を…。

男は、唯一の成功体に命令を出した。

「…御坂真琴を殺せ！」

唯一の成功体は命令を遂行する為に動き出す。

御坂美鈴は常盤台中学の敷地内を一人歩いていた。

自身の息子となった真琴を、女子校である常盤台中学へと通わせるという名の任務は達成した。

美鈴は駄目元だったのだが、常盤台中学の理事達は、

「常盤台中学に学園都市第零位が入学するのなら、性別に問題はあ  
るが特別枠として迎え入れる」

と、快く許可したのだった。

これによって常盤台に通う事が決定したので、美鈴は真琴達に連絡しよう  
と常盤台の敷地内を出たのだが、そこには真琴が歩いていた。  
「あらー？真琴ちゃんじゃなーい。明日から常盤台に真琴ちゃんも  
通う事になったわよー」

と、美鈴が真琴に向けて声をかけるが、真琴の反応はない。

ただただ美鈴に向かって歩いてくるだけだ。

「真琴ちゃん？やつぱり常盤台じゃ嫌だったー？真琴ちゃん？」

一切返事をしない真琴に美鈴は疑問を持つ。

美鈴は反応のない真琴の顔を覗き込んだ。

そこには、御坂真琴という名の皮を被った化け物がいた。

「ッ！」

そこで美鈴は意識を失った。

ファミレスで美鈴と別れた真琴達は、寮へと戻った。  
美琴はその後、コンビニに行くと言って、外へ出た。  
真琴は本の続きを読み出した。

本を数冊読み終えた真琴は、今何時かと確認する。  
すると、あれから三時間以上が経過していた。

常盤台への入学が決まったのなら、とつくに連絡が来ても良い頃なのだが、連絡がないという事はやっぱり常盤台は無理だったと判断した真琴は少し上機嫌でまた別の本を読み出した。  
が、真琴の携帯が鳴り出した。

一瞬、美鈴が学校の事で連絡してきたのかと思ったが、携帯のディスプレイには別の人物の名前が表示されていた。

『絹旗最愛』

真琴は任務かと思いきや憂鬱になった。

出ない訳にも行かず、渋々電話に出た。

「あ、真琴。さっさと出るですよ。超遅いです」

「すみません。そんなに焦ってどうしたんですか？次の任務ですか？」

電話の向こうの絹旗は、とても焦っているようだった。

「超先程、『アイテム』にあなたに向けての脅迫状が届きました」

「ああ？何処のどいつだア？」

「ッ！内容を見ると何処かの研究所の男のようです。人物までは超特定できてません」

真琴の口調が一瞬にして変わった。

絹旗は一瞬驚くが、そのまま報告を続ける。

「…内容を早く言え」

「えっと、ですね。『御坂真琴。御坂美鈴は預かった。返してほしくば我が作り出した最強の実験体と戦え。X - 228561・Y - 568714で待つ。絶対に貴様を殺す!』だそうです。今麦野が『お母様!今私が助けに行きます!』と超暴れて情報を探しています」

「麦野は抑え付けとけ。邪魔だア」

麦野が何故か錯乱しているようだ。

真琴は、麦野が錯乱している理由が分からない。

「超無理言わないで下さい。麦野は超場所が分かってないので、どうしようもないと思いますが…。場所に心当たりがあるなら超先行して下さい」

「援護はいらねエ。邪魔すンじゃねエ」

「超了解です。でも…超気をつけて下さい」

絹旗はとても心配そうに言った。

「ハッ!誰に言ってるやがんだア!？」

真琴はそのまま電話を切った。

ドンッ!

真琴は壁に拳を叩きつけた。

「絶対にぶっ殺してやる!」

真琴は自分の家族と認識した人が、傷つけられるのを嫌う。

出会ったばかりだが、美鈴の事を、真琴は大切な家族だと認識したようだ。

真琴は指定された場所へと、全力を持って向かう。

自身の母親を助け出す為に…。

「ククク、早く来い。御坂真琴。貴様が絶望する様を私に早く見せてくれ！」

一人の研究者が闇夜の月に向かって叫ぶ。

まるで、自身の勝利が決定しているかのよう…。

第二十話 九月七日？（後書き）

こんな駄文を読んで頂きありがとうございます。  
感想等あれば、よろしくお願いします。

## 第二十一話 九月七日？

「チツ、うぜエ場所を指定しやがって…」  
真琴は指定された場所へと辿り着いた。

X - 2 2 8 5 6 1、Y - 5 6 8 7 1 4

そこは列車の操車場であり、真琴にとって一方通行と二度も闘った因縁深き場所だった。

「今日は月がねエのかア…」

「やあ、早かったねえ。御坂真琴君」

暗闇の中から突如、一人の男が現れた。

「…テメエが脅迫状を送りつけた糞野郎かア？」

「はは、糞野郎とは酷いなあ。ああ、それと母親はそこだよ」

謎の男が左側を真つ直ぐ指差した。

そこには、コンテナに張り付けられた御坂美鈴がいた。

それと隣に男が一人。

その男はフードを深く被り顔は見えない。

「あれがテメエの実験体ってヤツかア？」

「…ああ、そうだよ。…あれは私が作り上げた、お前を超える 戦 闘 兵 器 だ ア ！ ！ ！」

刹那、フードの男が真琴へと駆け出した。

自身へと向かって来る男に対して、真琴は迎撃する。

まず様子見か、真琴はポケットからコインを取り出し、姉と同じように『超電磁砲』を男へ放つ。

「ッ！？」

が、真琴が放った『超電磁砲』は自身前の地面に直撃し、砂が舞い視界を塞がれた。

男は一方通行のように、『反射』を『超電磁砲』に適用したのであ

った。

視界が悪い真琴は、自身へと高エネルギーが迫っているのを感知した。

高エネルギー反応は『超電磁砲』であった。

真琴は咄嗟に『原子崩し』で、『超電磁砲』の軌道を曲げた。

「があッ!？」

そこへ真琴の腹に衝撃が走った。

いつの間にか、懐に入っていた男の拳が真琴に突き刺さった。

そのまま真琴は吹き飛ばされた。

真琴は吹き飛ばされながらも、男を探すが男はいない。

「…何処行きやがったア!？ツ!!！」

突如、真琴は危機感を感じ、腕をクロスさせ防御体勢に入る。

そこに『空間移動』でも使ったのか、いつの間にか近づいていた男の蹴りが飛んだ。

蹴りの威力は凄まじく、ガードさてもなお、男とは反対方向へと地面を削りながらまたもや、真琴は吹き飛ばされた。

そのまま両者には距離が開いた。

二人の戦闘は一度睨み合いになるが、此処まで見ると真琴が押されていた。

「どうだい？真琴君、私の最高傑作は？君では勝てはしないよ」

その睨み合いの中、科学者の男の声が辺りに響いた。

「うるせエ、直ぐに消し去ってやるから黙って見てろオ！」

「ははは、精々足掻き苦しむが良いさ」

科学者の男は観戦に戻ったようだ。

しかし、二人の睨み合いは続く。

が、二人の周りには突如雪が降り出した。

此処から真琴の番が始まった。

「…エターナル・フォース・ブリザード!ってかア!!！」

真琴は両手を広げて叫んだ。

刹那、男の周りの水分だけが凍りつく。

しかし、男は全身から炎を出して自身が凍りつくのを防いだ。

だが、真琴はその隙を見逃さない。

影から取り出した『グングニル』を男に向けて投げ放つ。

男はなんとか『ロー・アイアス』を作り出し、防ぐ事に成功するが、それは男にとつて悪手であった。

真琴は『グラム』、『バルムンク』、『カラドボルグ』、『ブリユ  
ーナク』といった、神話の武器達を休む暇を与えずに放つ。

男は盾を使ったり時には、同じように武器を作り出し相殺していく。  
防戦一方だった男は徐々に均衡していった。

だが、その都度、真琴は攻め方を変える。

時に武器を放ちながら、接近戦を挑んだり、時には、『超電磁砲』  
や『原子崩し』を放つ事によって、男が均衡するのを避ける。

よつて男はなかなか、攻めに転じる事が出来ないういた。

そんな戦闘を繰り返している中、戦場から少し離れた場所に一人の  
男が降り立った。

その男の視線は一人の観戦者に向けられていた。

男の見た目は、髪は金髪でホストのような服装であった。

「ヤツは何をしているんでしょうね」

科学者は、自分が作り上げた戦闘兵器が押されている事に怒りを抱  
いていた。

「さつさと殺しなさい」

「じゃあ、遠慮なく。ここでお別れだ」

「えっ!??」

科学者は自身の呟いた言葉に、背後から返事が返ってきた事に驚く。  
慌てて振り返ろうとするが、科学者は襲撃者の顔を見る事無く死亡

した。  
辺りに天使のような羽根だけが舞っていた。

何時しか、男のフードは取れていた。

その男は真琴と全く同じ容姿をしていた。

真琴は一瞬戸惑うが、今は戦闘だけに集中する。

何しろ、二人の戦闘能力は殆ど互角だった。

二人は同じ科学者から作り出された同じクローン。

片や、実験途中に逃げ出し、学園都市の暗部に所属するが今を幸せに生きる。

片や、色々な能力を頭に詰め込まれ地獄のような実験を生き残るが、命令に従うだけの戦闘兵器。

守る者がいる者と、ただ命令の従う者。

どちらが強いかは明白だった。

しかし、弱いのも明白だった。

守る者が多いほど人は強くなれる。

だが、戦場に守る者がいると本来の力は発揮出来ない事もある。

真琴を殺す為に人質であった美鈴が、ついに狙われてしまった。

男はいくら攻撃しようとも、真琴を殺す事ができないという事実には痺れを切らしたのか、あるうことが美鈴に向けて『超電磁砲』を放った。

男とほぼ互角の戦闘を繰り広げていた真琴は、一瞬気づくのが遅れ

た。

しかし、その一瞬が命取りであった。

すぐさま、真琴は『空間移動』で美鈴の元に移動するが、『超電磁砲』はもうすぐそこに迫っていた。

真琴は美鈴を美琴のいる寮へと『空間移動』させるが、自身の防御に間に合わなかった。

「か、はあっ!？」

コンテナが吹き飛ばされる。

『超電磁砲』をまともに食らった真琴は、コンテナに叩きられコンテナごと吹き飛ばされていた。

コンテナに寄りかかりダウンする真琴。

男は真琴にトドメを刺そうと、ゆっくり近づく。

「ムカツいた。第零位ってのはこんなものか」

科学者を葬った男は、真琴の戦いを見てがっかりする。

が、この男も真琴へと飛んで行く。

「早く起きねえと、俺がぶっ潰しちまうぞ!」

第二十一話 九月七日？（後書き）

オリキャラの名前はまだまだ募集中です。  
感想等あればお待ちしております。

第二十二話 九月七日？（前書き）

指摘があったので二十一話を少し修正しました。

## 第二十二話 九月七日？

コンテナに寄りかかる真琴。

真琴にトドメを刺そうと近づく敵。

敵か味方も分からない男。

月が見えない闇夜の中、三人は集結した。

「がつ、く…そ…がつ」

ダウンしていた真琴は、よろよろと立ち上がろうとする。

辺りには砂埃が立ち込めていて、視界は悪いとしか言いようがない。

そんな中、人影が現れた。

真琴は急いで立ち上がろうとするが、足は言うことを聞かない。

絶体絶命だと思われた中、現れた人物は真琴の知らない男であった。

「ムカついた。お前がそんなつまらない男だとはな。俺の助けは必

要かよ」

「…誰だ…テメエ…？」

「…テメエ…俺を知らないだと…？第零位、大したムカつきぶりだ」

そう言いながらも、男は真琴に手を差し出す。

そして、真琴を助け起こしながら言った。

「…学園都市第二位『未元物質』垣根帝督だ！その腐った頭に覚え

させておけ！」

真琴は思う。

敵ではない、と。

そのまま真琴は、垣根帝督に連れられその場から離れた。

別のコンテナの影へと二人は場所を移していた。

「で、テムエはなんで此処にいる？」

「俺に脅迫状を送りつけたやがった糞野郎をぶち殺しにだよ！そういうテムエは何しに来やがったア。垣根帝督ウ！？」

「『仕事』だよ。科学者一人の抹殺と戦闘兵器の始末だ。もう科学者は殺したぜ」

「ッ！？テムエ！！」

真琴は垣根帝督に殴りかろうとするが抑えつけられた。

「…おいおい。仕方ねえだろ。こっちも『仕事』なんだからよ！」

「チツ！あの糞は俺が殺す！テムエは手エ出すンじゃねエぞ！？」

「分かった分かった。好きにしな」

真琴はそれだけ言うと垣根帝督から離れ、自身のクローンの元へと向かった。

その場には垣根帝督だけが残された。

ピリリリリッ

垣根帝督の携帯が鳴り出した。

「…なんだ？」

「……………」

「！？そうか、分かった」

と、垣根帝督は電話を切った。

「ヤツが」

『だとはな。邪魔になる前に始末する

か？」

垣根帝督は目的に向かって動き出した。

男は操車場の見通しの良い場所に佇んでいた。

その男の前に真琴が、コンテナ群の中から姿を現した。

「待たせたかア？まあ、問題ねエよなア？じゃあさっきの続き、始めようぜエエエー！」

真琴が男に向かって駆け出した事によって、二人の第2ラウンドが始まった。

真琴は男へと駆け出しながら『干将・莫耶』を自身の手の中に作り出した。

男も『干将・莫耶』を作り出し、真琴に応戦する。

二人の間には激しく火花が散った。

お互い、相手の手にある獲物を弾き、時には避け、時には距離を取る。

二人の獲物は次々と変わる。

が、二人とも同じ獲物で、相手よりも自分が上だという事を証明する為に戦った。

しかし、お互いの技量は全くの互角で勝負はつかない。

二人は突如、大きく距離を取った。

「…うっ…ぜエ！本当にム力つくぜエ…」

真琴は不満を吐き出すが、男は無言で反応もしない。

その様はあの科学者の言っていた通り、ただの戦闘兵器だった。

「チッ！」

真琴が不愉快に舌打ちすると、それが合図だったように、男は真琴へと槍、剣を投げ放ちながら電撃を放ち始めた。

真琴は全て相殺、又は防御する。

そして真琴は男を打倒する為に思考する。

「想像、創造しろ。『自分だけの現実』の可能性を無限に広げてみせるオ！勝てないのなら勝てるものを作り出せエ！それが俺の存在価値だア！！」

ドオオオッ！

刹那、操車場の空気が変わった。

突如、真琴の周りが爆発したのだ。

爆発によって男からは真琴の姿が視認できなくなった。

そのため、男は攻撃の手を一時的に止めてしまった。

それが男にとって運命が決まった瞬間であった。

爆発の煙の中から一瞬、飛び出す影があった。

しかし、その影は速すぎた。

爆発に注目し、真琴の動向を注視していた男達、その誰もがその姿を捉える事は出来なかった。

真琴を捉える事が出来た時には、男の懐に入り込んでいた。

自身と電磁波を融合させた為か青白い光を放つ、御坂真琴の姿が、そこにはあった。

誰もが驚愕した。

数百メートルは離れていたはずなのに、たった一瞬のスピードで…。真琴はただ拳を振るう。

それだけで真琴は、一方的に男を死に追いやった。

ドオオッソッソ！

暫くして、男の体はコンテナへと突き刺さった。  
そして真琴は、手の中に一本の槍を作り出す。

ダァァン！

真琴は槍を男の体へと突き刺さした。

男はもう動く事は無かった。

真琴の放った槍の名前は『ゲイ・ボルグ』。

槍は男の心臓を貫いていた。

「じゃあな、お前は俺の（心の）中で生き続けなァ」

真琴は男へ呟いた。

刹那、男は微かに笑ったように見えた。

男の能力は、確かに真琴へと受け継がれて生きていた。

そして真琴は、男に背を向けて歩き出す。

その瞬間、白い羽根達が真琴の行く手を遮った。

「なんのつもりだァ、垣根帝督ウ？」

真琴が羽根の飛んできた方を見ると、六枚の白い翼を背中に生やした垣根帝督の姿があった。

「テメエを此処で始末した方が後々楽そうだ」

「ふっソッソ。やってみなァァァ！」

この瞬間、『アイテム』の御坂真琴と『スクール』の垣根帝督は敵対した。

垣根帝督は真琴の視界を埋め尽くすぐらい『未元物質』を放った。

真琴は出来るだけ剣を作り出し相殺させる。

しかし、その数はあまりにも多すぎた。

真琴の足元に二、三枚の『未元物質』が突き刺さった。

突き刺さった『未元物質』は派手に爆発する。

だが、すでに真琴は数メートル後方に下がっていて、体は無傷であった。

垣根帝督はそれでも『未元物質』を放つ手を緩めない。

いつか、捌ききれなくなると垣根帝督は確信していた。

一方、真琴もいつか捌ききれなくなる事はわかっていた。

よって真琴は、自身の持つ能力から己の『自分だけの現実』の可能性を広げた。

青白い光を放っていた真琴の背中から、垣根帝督と同じように青白い光を放つ翼が生えた。

しかし、翼は二枚だけだ。

「!? テメエ!!!」

その真琴の姿を見た垣根帝督は激怒する。

「チッ! やってみるよ! 所詮、贗作に過ぎねえんだよ!!!」

所詮は贗作。

自身の有利は変わらないと、垣根帝督は己の『自分だけの現実』を駆使用する。

対する真琴は、初めの内は垣根帝督と同じように羽根を放っていた。しかし、真琴の羽根は少しずつ変化していった。

それを見て垣根帝督はまずいと思ったのか、戦いは翼を駆使した高速戦闘へと移行した。

二人は空中で幾度も激突する。

空中での高速戦闘は、垣根帝督にとって有利に働いた。

真琴にとって、翼を使った空中での戦いじたい初めての経験であり、その上高速での戦闘。

真琴は次第に傷付いていった。

「どうした、第零位? 所詮、そんなものかよ? それじゃあ、この俺

がテメエをぶつ潰してやるよ!!」

垣根帝督は攻撃を緩めない。

真琴は次第に満身創痍になっていく。

だが、真琴の翼は四枚になっていた。

しかし、垣根帝督はそれに気付かない。

そして、真琴の翼は六枚になった。

垣根帝督は真琴の翼が六枚になっている事に、ようやく気付いた。

いや、気付くのが遅すぎた。

「なっ!? テメエ、いつの間に!?!」

「テメエが自分自身に酔ってる間にだよ、垣根帝督!!」

空中での高速戦闘は、もう互角だった。

いや、真琴が押していた。

ついに、真琴は垣根帝督を完全に超えた。

真琴の翼は八枚に増えていた。

それと同時に羽根が変わった。

羽根達は放つと、無数の剣達へと変化し垣根帝督へと襲いかかる。

その大群は、垣根帝督の羽根では相殺出来なかった。

垣根帝督は六枚の翼で叩き落とそうとする。

しかし、無数の剣達は垣根帝督を翼ごと地面に縫い付けた。

「グッアアアアッ!!」

垣根帝督の周りには血が飛び散っていた。

真琴は、そんな垣根帝督の前へと降り立った。

垣根帝督は最後の抵抗とばかりに羽根を放つ。

しかし、それは真琴の翼によって叩き潰された。

八枚の翼は、血を吸ったかのように赤黒く染まっていた。

真琴は『未元物質』を垣根帝督以上に、完全と言って良い程自分の物にしていた。

そして、真琴は垣根帝督にもう用はないと、トドメを刺さずに背中を向けて歩き出した。

「ちつくしよおおお!! 俺を殺せええ!!」

そんな真琴の態度に、垣根帝督はプライドを大きく傷つけられた。垣根帝督は叫ぶが、真琴は振り返る事は無かった。

「…後始末は任せたア」

「ふっざけんなあああ!!」

闇夜には垣根帝督の叫び声だけが残されたのだった。

真琴は寮についても、青白い光を纏ったままだった。

真琴が寮に戻ると、美琴と黒子が真琴の傷を見て大丈夫かと、心配する。

しかし、真琴は二人の事など気にも留めず、美鈴の安否を確かめた。美鈴が無事だと分かるとようやく、真琴は青白い光を収めた。

そのまま真琴は疲れの為か、傷の為かその場に倒れた。

それを見て、美琴と黒子は真琴をベッドへと運び傷を手当てをした。

「全くもう、こんなに傷だらけになって!!」

「まあまあ、お姉様。真琴様も男の子ですもの、仕方ないですわ」

「!?!? アンタなんで真琴の性別を!?!」

「一緒に暮らしているんですから、流石に分かりますわ。因みに寮監も知っております」

美琴はその事実を聞いて頭を抱える。

「まあ、いつか」

だが、美琴はすぐに開き直った。

良く考えれば、美鈴がそこら辺も何か手を打ってあるはずだ、と。

「それじゃあ、私達もそろそろ寝ますか」

そう言って、その日は幕を閉じた。

第二十二話 九月七日？（後書き）

感想等ありましたらお願いします。

第二十三話 九月八日？（前書き）

生きますよっ。

こんな駄文を待っていてくれた方がいたら、いいなあ…。

## 第二十三話 九月八日？

誘拐事件の翌日。

常盤台中学に入学させられた真琴は、夕暮れ時の街をとぼとぼ歩いてきた。

女子校に特例で真琴が入学した事によって、何かしら事件が発生したようだが今ここでは割愛する事にする。

背中に哀愁を漂わせて歩く真琴の前に、一人の男が現れた。

男も真琴と同じく背中に哀愁を漂わせ、体を引きずるように歩いていた。

その男は自身の姉が気にしている、上条当麻であった。

二人はお互いにお互いを見つけた瞬間…、

「「同士っ！！」」

何故か抱き合っていた。

周囲の視線などお構い無しだが、その視線はとっても痛い…。

その後、漸く周囲の視線に気付いた二人は、急いでその場を離れる事になった。

「はあ…はあ…、ふ、不幸だああああ」

「…五月蠅いです、上条当麻」

二人はいつの間にか、上条当麻が住む学生寮の近くまでやってきて

いた。

「…えっと、お茶ぐらいなら出させて頂きますが、家来ますか？すぐそこだから」

「…喉乾いたから行きます」

二人は学生寮に向けて歩き出した。

学生寮の入り口近くまでやってきた時に、不意に頭上から女の子の声が聞こえてきた。

「あー。かつ、かかかった、上条当麻だ上条当麻ー。御坂真琴もいるー」

「「？」」

二人が顔を上げると、七階通路にある金属の手すりから、土御門舞夏が上半身を乗り出して右手を振っていた。

いつも通り清掃ロボットのの上に正座した状態であるため、ものすごくバランスが危うく見える。

左手はモップを握り、それで床を突いている。

どうも、前進しようとしている清掃ロボットの動きをそれで封じているらしい。

「よ、よよ用事があったの急用があったの。というか上条当麻、お前は携帯電話の電源切ってるだろー」

「…それ、携帯の意味無いですよ。上条当麻」  
「？」

上条当麻はポケットの中から携帯電話を取り出し、画面を確かめているようだ。

上条当麻は首を傾げ、真琴を連れて急いでエレベーターに乗った。七階に到着すると、三毛猫がポツンと通路に座って携帯電話をくわえていた。

「緊急事態だ緊急事態だぞ。銀髪シスターが何者かにさらわれちゃったー」

「は？」

「はい？詳しい説明を要求します」

舞夏は白く青くなった顔で、

「だから誘拐だよ人さらい。通報したら人質殺すって言われたから何もできなかったの。ごめんなー上条当麻」

「ちよつと待て。何がどうなったか、順番に説明してくんないか？」

上条当麻が聞くと、舞夏はぼつりぼつりと説明を始めた。

舞夏が学生寮に『研修』でやってきたのは二時間前。

そこで掃除をしていた所、七階通路で暇そうにしていた銀髪シスターと出会って、世間話をしていた。

その世間話に割り込むように、突然銀髪シスターの背後から誰かが彼女の口を塞いで、連れ去った。

「去り際に、誘拐犯が封筒を渡してきたのー。そこに色々書いてあって……」

舞夏は上条当麻に封筒を手渡した。

上条当麻は一度だけ封筒に目を落としてから、

「いや、闇雲に動いて下手に状況悪化させるよりずっとマシだよ。

そんで、その馬鹿野郎はどんな感じのヤツだった？」

舞夏はちよつと考えるように頭上を見上げてから、

「うーん。まず身長が百八十センチを超えててなー、白人さんっぽかったぞ。でも日本語は上手だったし、見た目だけでどこの国の人かまではわからなかった」

「ふんふん」

「外人さんですか……」

「それで神父さんみたいな格好でなー」

「ふん？」

「……」

「…誘拐犯、そんな目立つ格好で良いのでしょうか」

「神父のくせに香水臭くて、肩まである髪が真っ赤に染まってて、両手の十本指には銀の指輪がごてごて付いてて、右目の下にバーコ

ードの刺青が入ってて、くわえ煙草で耳にはピアスが満載だったー」

「…良いのですか誘拐犯、そんなに目立ってしまっても」

「……、おい。すつごく見覚えあるぞ、その腐れイギリス神父」  
上条当麻には、何か心当たりがあるらしい。  
舞夏は『？』と首を傾げていた。

「……誘拐犯は上条当麻の知り合いですか」

「えっ、う、うん。知り合いたくなかったけどな」

上条当麻はそう言いながら、封筒を調べ出した。

「……。今時、定規で筆跡隠しかよ」

「……」

真琴は上条当麻がすつごく可哀想にみえた。

今日び、定規で筆跡を隠した程度で身元が割れないと本気で考えているのだろうか。

真琴は上条当麻の知り合いに呆れてしまった。

「あー、大丈夫だぞ舞夏。多分この犯人は俺やインデックスの知り合いだ。だから心配しなくても……」

「は、犯人は知り合いだったのか！？動機は歪んだラブなのかー？」

「あ、え？いや、そういう意味じゃねーんだけど……。でも歪んだラブはありそうだな。はあ……」

と、上条当麻は溜め息を吐いた。

「という訳でありまして、真琴さん。お茶はまた今度ということでは如何で御座いますしょう……」

「上条当麻。僕も一緒に行きます」

「え、いやー、真琴さん。少々問題がありまして、学園都市外に行くので許可証が必要なんです……」

「うん。大丈夫大丈夫」

「いや、だからですね……」

「大丈夫」

「そ、そうですね……」上条当麻は真琴に学園都市外にどうやって出るのか、追求する事を諦めた。

学園都市外。

真琴は学園都市の外壁を飛び越え、出入り口から出てきた上条当麻と合流し、外壁沿いの道を歩いていった。

「おい。目的地はあとどれだけあんだア？」

「えっと、歩いてあと一時間ってところですよ」

「はアア！？一時間ってテメエなア。誰がンなとこまで歩くかよオ！」

「でもですね、真琴さん。移動手段がないんですよ（ふ、不幸だあああ）」

「バス使うぞ、バス。そこにバス停あるし」

暫く歩いた二人は、漸くバス停へとたどり着いた。

二人はその停留所でバスを待つことにするが、先客がいたようだ。

外国人の少女。

彼女は時刻表のくつついた停留所の看板を、超近距離から食い入るように眺めている。

そのままピタリと動きが止まっている所を見ると、読み方が分からないのかもしれない。

服装は何を考えているのか、この猛暑の中で真っ黒な修道服だった。当然、長袖長スカートである。

「あのー……」

シスターさんの方から話しかけられた。

とてつもなく丁寧な日本語で語り始める。

「恐れ入りますが学園都市に向かうためには、このバスに乗れば良

いのでございましょうか？」

丁寧だがヘンテコだった。

上条当麻は一度真琴の顔を見るが、『我関せず』だったので自分が対応する事にしたようだ。

シスターさんの方を振り返った。

「いや、学園都市行きのバスはねえよ」

「はい？」

「だから、学園都市は『外』との交通機関を切断しちゃってんの。つまりバスも電車も通ってない。乗り入れ契約してるタクシーなら入れるけど、普通に歩いて行ったほうが安上がりだぞ」

「そうでございますか。それであなた様達は徒歩で学園都市から出てきたのでございますね」

シスターさんがすらすら言うので上条当麻は振り返った。

だがゲートは見えない。

上条当麻はシスターさんの方を見ると、彼女は袖の中からごそごそと何かを取り出した。

安っぽいオペラグラスだった。

「こちらで確認したのでございますよ」

シスターさんは笑って言った。

と、ポロポロの停留所に合わせたようなオンボロのバスがやってきた。

炭酸の抜けるような音と共に、バスの自動ドアが開く。

上条当麻はシスターの方を振り返りながら、

「とにかくバスに乗っても学園都市には行けねえから。許可証持ってるならそのまま歩いてゲートへ行けばいいよ。多分七、八分ぐらいで着くと思うけど」

「これはこれは、お忙しい中、ご助言いただき、まことにありがとうございます」

漆黒のシスターさんはにこにここと笑いながらぺこりと頭を下げて……

……そのままバスに乗り込んでしまった。

「って、おい！バスに乗っちゃ駄目だつた五秒前に！」

「あ、はい。そうでしたね」

停まっているバスから長いスカートを手で摘んでいそいそと降りてくるシスターさんの上条当麻は、

「だからな。学園都市は『外』との交通機関を切断してるんだよ。

だからバスも電車も繋がってないの。街に入りたければ歩いてゲートへ行って来い。分かったか？」

「確かに。すみません、何度も何度もご迷惑をおかけしてしまって苦笑いと共にシスターさんは上条当麻にぺこりと頭を下げつつ、彼女はそのままラップを踏んでバスの中へと吸い込まれていく。

「…おい。もうほつとけエ、バスに乗るぞ」

「真琴さん。もう少し待って頂けますか？こらあ！！テメエこつちの説明を笑顔で全部聞き流してんだろ！？」

「え？いえ、決してそのような事はございませんよ」

再びいそいそとバスから降りてくるシスターさん、運転手は迷惑そうな顔のままバスの自動ドアを閉め、乱暴にバスを発進させた。

だが、真琴達はまだ停留所にいた。

もう一度言う。

運転手は迷惑そうな顔のままバスの自動ドアを閉め、乱暴にバスを発進させていった…。

だが、真琴達はまだ停留所にいた…。

大事な事なので二回言ったよ…

「って、おい！！こらア！？待てエ！！？」

「なんだよ！？こつちはこのシスターさんに説明するのに忙しいんだよ！！」

「ふざけんなア！？こちとら、まだバスに乗ってねエだろうがア！！」

「んなもんどつでも……、あつ！」

真琴の言葉に上条当麻も気付いたようだが、もう遅い。すでにバスは遙か彼方へと消えていた。

「ふ、不幸だああああ！！」

「……………#」

空には上条当麻の叫び声だけが響いたのだった。

が、シスターさんは二人の様子など気にしない様子で、

「おや、何かイライラしているように見えるのでございますね。飴玉などはいかがでございますでしょうか？」

ブチイイ！

「コ、コイツぶつ殺す！！」

「真琴さん！？お願いですから止めて下さい！！？」

シスターさんの言葉にブチギレた真琴は、シスターさんを殺そうとするが、上条当麻に後ろから抑えられる。

「は・な・せエ！！コイツを殺させるオ！！#」

「何言っちゃってんですか！？離れたら死人が出るでしょうがっ！

！？」「おや、興奮していらっしやるのでございますね。飴玉をどつぞぞ？」

シスターさんは飴玉を取り出し、未だ上条当麻に取り押さえられている真琴の口の中へと放り込んだ。

「っ！？につがア！！？…コ、コイツ絶対ぶつ殺すううっ！！」

「だから、止めるってえ！！ふ、不幸だああああ！！」

第二十三話 九月八日？（後書き）

勢いでやった後悔はしていない…多分。

この小説を待っていてくれた方々へ。

遅くなってごめんなさい。

そしてありがとう。

こんな小説でよければ、これからもよろしくお願いします。

あと、タイトルを変えようか考え中。

何か案があればお寄せ下さい。

第二十四話 九月八日？

「はあ……はあ……」

「真琴さん、落ち着いたでしょうか……？」

「ああ、すまねエ」

暫くして、真琴は落ち着いたようだ。

が、その原因であったシスターさんは全くもって自分が悪いとは気付いていないようだ。

「はあ。渋柿キャンディはお口に合わなかったようでございますね。叫んでいらつしゃいましたので、喉が枯れないようにと思つたのでございますが……、たしか喉が渴かなくなる効果があるんでございませぬ」

「……。あー、それ唾液が出やすいからな。でもこの炎天下で元々体の中に水分が少ない場合は何の意味もないから」

「まあ。水分が足りていないのでございますか。それならそうと言つていただければ、お茶の用意はございますのに」

「おい。お茶があるならくれ！今すぐにイ！」

「何で修道服の袖の中から魔法瓶が出てくるのかと聞かないんですね、……真琴さん。そつちはホントにありがたいかも。中身は何なの？」

「麦茶でございますよ」

「おつ、もらつもらつ」

「おお、……神よオ。テメエは俺を見放さなかつたアア！」  
真琴達は素直に喜んだ。

先に真琴がシスターさんから魔法瓶のフタ兼カップを受け取つて、  
「……熱ウ！何で麦茶なのに沸騰してんだア！？……ああ、神は俺を見放したア」

熱い麦茶に真琴は肩を落とす。

「はあ。確か、熱い時に熱い飲み物を用意するのがこの国の嗜みで

「ごぞいましょう?。」

「おばーちゃん?そうか、おばーちゃんだな!さつきから何か言動が怪しいと思つてたらおばーちゃん的思考回路の持ち主なのか!？」  
上条当麻は叫ぶがシスターさんはにこにこ善意の笑みを浮かべるばかり。

真琴は肩を落としたまま、お茶を飲む気配はない。

今さらカップに注いでもらったお茶を捨てる訳にもいかず、上条当麻は真琴の手の中からカップを奪い、ぶるぶる震えながらマグマのようなお茶を飲み干していく。

「……、さんきゅー。あとそれから、ちょっと質問するけどさ。シスターさんは学園都市に行きたいって言つてたよな?。」

「はい、はい」

「えつとさつきも言つたけど、街が発行してる許可証はちゃんと持つてんのか?。」

「許可証、でございますか?その許可証というのは、どこでもらえばよろしいのでございましょうか?。」

「……、ごめん。一般の人はどんな努力をしても発行してもらえないぞ」

「はあ。それでは、もう諦めるしかないのでございますね」

シスターさんはしょんぼりと肩を落とした。

だが、シスターさんは、

「それでは」

と言つて学園都市の方に向かって歩き出していた。

「だからアああああ!許可証がなきゃ街に入れないって……聞けよデメエは!」

「言われてみれば」

シスターさんは立ち止まって振り返る。

ついさつきまでほのぼのと笑っていたくせに、シスターさんの顔がみるみる曇っていく。

「なあ。お前はどつして学園都市に行きたいんだ?。」

「はあ」

シスターさんはちょっと首を傾げて、

「実は私、追われているのでございます」と言った。

「追われ……？」

「…詳しく話してみなア」

いつの間にか真琴が復活していた。

「はい。ちょっとしたいざござがありまして、ただいま絶賛逃亡中なのでございます。学園都市は教会諸勢力の手が及ばない所だとお聞きしているので、できればそこへ逃げ込みたかったのでございますが」

「教会……。なあ、それつてもしかして魔術師絡みなのか？」

「おいおい。コイツも魔術師かよオ」

真琴達の言葉に、シスターさんはびっくりした顔で、

「何故、魔術師の存在を認めているのでございましょう？」

「その反応は、ビンゴって事か。はあ……。学園都市、か。本気でお前が追われてるんだとしたら、街に入った程度じゃ完璧とは言えねーぞ。つつか、それぐらいじゃ気合入ってるヤツはバンバン侵入してくるし」

「それでは、どうすれば……」

シスターさんはやや泣きそうな顔になる。

「……バスの路線図を読む事ができるのでしょうか？」

「おい、コラア!？」

「何個前の話題だよ!しかも路線図ってなんか新ワードが追加されてるし!学園都市に入る入らないの話はどこ行った!？」

「ああ、なんだか頭が痛くなってきたぜエ」

シスターさんと上条当麻のやり取りに呆れたらしい真琴は、話を聞く事を諦めた。

「はあ。頭痛でございますか?それならこれを……」

「ふ、ふざけんなア!?!これ以上余計な事すると本気でぶっ殺すぞ」

オ！！？つかア、テメエの袖は四次元ポケットかア！！」  
シスターさんが袖の中から取り出したものは……、なんと長ネギだった。

暫くした後、話が纏まったのか三人は漸く動き出した。

そして、一時間歩いたのち、三人は漸く目的地であるらしい薄明座跡地の敷地へと足を踏み入れる。

「ありや？」

上条当麻が突然声を上げた。

中から出てきた三人に知り合いでもいるらしい。

「とうま、そのシスターさんとはどこで会ったの？」

「……、のっけからそれか。つつーかこっちも主にお前の横に立つてる凶悪神父に聞きだいなだけだな、何でまたこんな手の込んだ誘拐ごっこなんかやってんだ。そしてこの炎天下中三キロもぐだぐだと余計に歩かされた理由もぜひ問い質したい！是非だ是非！是が非でもと書いてな！！」

叫ぶ上条当麻に、神父は面倒臭そうな顔で、

「ああなんだ。狂言だっというのバレていたんだね。君をここへ呼んだのは人捜しを手伝って欲しかったからだよ」

「そうか、そうか。テメエが誘拐犯かア。で、要件は人捜しと……ぶち殺し確定！」

「な、何だい君は！？上条当麻、彼をどうにかしてくれないか！？」

「あー、もう無理。諦めろステイル。それがお前の罪だ」

「そ、それはないだろ！？ち、ちよっと、ま、待て！話し合おう。話せば、……ぎゃあああ！？」

神父はこの地で亡くなりました。

「あちらは置いといて、話を進めよう。そっちの女の子は？」

「は、はい。ローマ正教のアニエーゼ・サンクティスです」  
厚底サンダルのシスター少女が頭を下げた。

「悪いが君の世迷言に付き合っている時間はないんだ。さつきも言っただけ、君達をここへ呼んだのは人捜しが目的だ。今も二百五十人体制で捜索しているが一向に見つからなくてね、時は一刻を争っているんだ。人の命が関わる問題だから速やかに協力して欲しい」  
復活したステイルが、そう言い放つ。

「世迷言って……。協力を求めてくるくせにゲストって感じのいたわりが一切ないし！くそ、何だよもう！人の命が関わるってどういう事だ、一からちゃんと説明しろ！つか素人の俺達なんか人捜しのスキルなんてねーぞ！」

「ああ、大丈夫大丈夫。君の隣にいるシスターをこっちに引き渡してくれば良いだけだから」

「ああ？」

「はい？」

「だから、君の隣にいるシスターが行方不明の捜し人だよ。名前はオルソラ・アクイナス。はいお疲れ様。いやあ良く頑張ってくれたね。上条当麻、君達はもう帰って良いよ」

「……、あの。狂言誘拐かまされて、出所の怪しい学園都市の外出許可を片手に街から出てきた挙げ句、四十度弱の炎天下の中を三キロも歩き続けたわたくしめの立場は？」

上条当麻は俯いてぶつぶつと言い出した。

「だからお疲れ様と言っているじゃないか。何だ、カキ氷でも奢って欲しいのかい？」

ブツン

上条当麻のこめかみの辺りから面白い音が聞こえてきた。

「これまではさ。馬が合わないとは知りながらも仲良くやっていこうとは思っていたんだ。本当だぞ。本当に思っていたんだぞ？ああ、この瞬間まではな……！」

「じゃれてないでさっさとオルソラをアニエーゼに引き渡せ。何だ、

君はもしかして構って欲しいのか。あいにくと僕は君の寂しさを埋める事はできないし気持ち悪いからしたくない」

「う、うううううううう。真琴、コイツ殺しても良いぞ……」

「了解した」

「ま、待て待て、やめたまえ！き、君も近付くな！」

上条当麻はステイルの叫びを無視して、オルソラの方へ振り返る。

「……そっぴや、お前誰かに追われてるって言ってたけど、この『人捜し』と関係してたのか？ま、お仲間と合流できたんならもう大丈夫だろっけど」

上条当麻が声をかけると、オルソラは何故かビクンと体を震わせた。それは抑えようとして失敗したような、小さな震えだった。

「ふむ。不安になる必要はないさ。僕達イギリス清教も仕事が終わればさっさと撤退する。ま、その程度の警戒心は持つてしかるべきだとは思っけどさ」

部外者である真琴達にはみんなまとめて『教会の人』とか『魔術世界の住人』とひとくくりに見えてしまう。

だが、彼らは彼らでローマとかイギリスとか色々あるのか、と考えてしまう。

さて、これで事件は解決。

そして、解散って時に……。

事件はまだ終わっていなかった。

『いやいや。そうそう簡単に引き渡されては困るよなあ？』

突如、真上から野太い男の大声が聞こえてきた。

真琴達が真上を見上げると、七メートルほどの高さにソフトボールぐらいの大きさの紙風船が浮いていた。

「オルソラ・アクイナス。それはお前が一番良く分かっているはずよな。お前はローマ正教に戻るよりも、我らと共にあった方が有意義な暮らしを送る事ができるとよ」

瞬間。

ゾフツ！！

鋭い音と共に、真琴達とオルソラを遮るよつに地面から一本の剣の刀身が飛び出た。

さらに二本、オルソラを囲むように、

ゾンツ！！

ギンツ！！

と、地面から剣が飛び出す。

飛び出した剣は、サメの背びれが海面を引き裂くよつに、地面を一直線に滑った。

三本の剣がそれぞれ突っ切ると、地面はオルソラを中心とした、正三角形に切り抜かれる。

「あ……………ツ!？」

「あ……………と重力の消える感覚にオルソラが恐怖というより戸惑いに近いこを上げる。」

だが、それが明確な悲鳴になるより早く、正三角形に切り抜かれたアスファルトごと、オルソラの体が暗い地下へと落下していく。

「天草式!!」

アニーゼが叫んで手を伸ばそうとしたが、もう遅い。

オルソラの体は暗い闇の底へと呑み込まれてしまっている。

上条当麻さ慌てて穴の縁へと走り、忌々しそうに舌打ちする。

「下水道かよ……ッ！」

『ローマ正教の指揮官さえ追ってれば、オルソラ・アクイナスがどこへ逃げようが誰に捕まるうが、いずれはここまで連れて来られると踏んでいたのよ。まったく地下を辿って待ち構えていた甲斐があったというものよなあ!!』

真琴達には状況が全く掴めない。

下水道に潜んでいたのは誰なのか。

いきなりオルソラを攫った理由は何なのか。

しかし、これだけは分かる。

連中は、いきなり問答無用で刃物を使って人間を奪った。

それも話を聞く限り、突発的なものではなく、事前に計画を立てて、ずっとなんとひたすらにチャンスを待ち続けて。

「くそ!!」

上条当麻は正三角形に切り抜かれた穴の中を覗く。

暗いので遠近感が掴みづらいが、それほど高くはないと感じられた。

彼は飛び降りようと穴へ向かって、

「待って！駄目だよ、とうま!!」

銀髪シスターが思わず叫んだ瞬間。

キラリッ！

闇の中から、何十もの刃の光が閃いた。

だが、一つの影が動き出した。

「どけェ!!」

真琴は上条当麻を横へと突き飛ばし、そして何十もの刃など気に留

めず、オルソラが攫われた穴へと飛び降りた。

## 第二十五話 九月九日？

午後十一時半。

真琴とオルソラ、そして天草式は『パラレルスウィーツパーク』にいた。

「オイ、本当に大丈夫なんでしょうか？」

「大丈夫だってえのよ。我ら天草式はオルソラに危害を加えたりしないってえのよ」

地面には、オルソラがテープでぐるぐる巻きにされた状態で転がっていた。

「ローマ正教なんぞにオルソラは渡せんよ」

時は遡る。

オルソラを追って穴へと飛び降りた真琴は、オルソラの後を一直線に追いかける。

途中で会った天草式の面々を無力化して。

真琴が地上へと出ると、建宮齋字が待ち構えていた。

「お前さんは勇気がある。たった一人で我ら天草式に突っ込んでくるとは恐れ入ったのよ。しかしいかんよなあ、無謀過ぎるのよ。見たところローマ正教の人間ではあるまい？ 目的はなんなのよ？ やはり法の書か？」

「法の書？ そんなもんどうでも良いんだよオ！ 目の前で助けを求め

てる奴がいるンダア。それを助けるってエのに理由がいンのかア？」  
「!?!」

真琴の言葉にオルソラが反応したが、気付く者は居なかった。

「ふっ、お前さん気に入ったよ。特別だ。特別に、この事件の真実  
つてやつを教えてやるのよ」

そういつて、建宮は真琴に事件の真相を語り出した。

「ハッ、そういう事かよオ！わかった、ブチ殺してやるぜエ!?!」

真琴は語られた真実に、我慢出来なかった。

今すぐにでも連中を血祭りに上げる為、動き出そうとするが建宮に  
止められる。

「連中は我ら天草式に任せて欲しいのよ。お前さんには手出し無用  
でお願いしたい。これは我らとローマ正教の問題だ」

「チッ、わかったわかった。今は関わらねエよ。だがなア、今後の  
展開次第で手エ出す事になるぜエ」

建宮に頭まで下げられた真琴は、渋々了解したのだった。  
しかし、天草式で無理な場合は真琴も出る事を了承させる。

その時だった。

ドンッ!!

一般用入り口の方で爆発が起きた。

「団体さんのご到着のようだなア？」  
轟々と火柱が上がっている。

「そのようだ。手は出すなよ?」

「ハッ、足は出るかもなア!」

それを合図に建宮と真琴は別れた。

暫く、離れた場所で戦闘を見ているとやはり天草式は押されているようだった。

「数で押されるってかア？」

その時、真琴の瞳にある光景が映った。

建宮が上条とステイルに敗れる光景だった。

「チツ」

真琴は舌打ちをして、建宮の元へと向かう。

「とうま、とうま！大丈夫、怪我とかない？どこか痛むところとかは！？」

真琴が辿り着くと、上条が銀髪シスターに服を脱がされそうになっていた。

「って、やめんかインデックス！いいよ別に痛む所とかないし……」

「…何してやがる」

「がっ！？」

上条に近づいた真琴は、背中を思い切り蹴り飛ばした。

「ちょ、ちょっととうまに何するんだよ！？」

「げほげほ、真琴さん？何故そんなに怒っていられるのでしょうか！？」

流石に、真琴の怒りは気付いているようだった。

「テメエのせいで色々台無しになったんだよオ！」

その言葉と共に、真琴は戦闘体勢に入った。

一方の上条も警戒する。

「…どういつつもりだ？」

「どういつつもり？ハッ、俺は天草式についたって事だよオ！…」  
そして、真琴と上条の戦いが始まった。

「ぐっ!?!」

ほぼ一瞬で懐に入り込んだ真琴は拳を振り抜き、上条の腹へと吸い込まれた。

上条も反撃に出るが拳は真琴に届かない。

上条の拳が当たる直前に、真琴は空間移動を使い距離をとる。時には大きく、時には数歩ズレるだけ。

上条に動きを読まれないようにと…。

真琴は能力を移動以外には使用せず、上条に接近戦を挑んでいた。戦いは一方的だった。

上条の拳は全て空振り、対する真琴の拳は全て必中。

「がつ!?!」

真琴のアップパー気味の拳が上条の顎へと突き刺さった。

上条は宙を舞う。

上条は地面に倒れ伏す。

意識はあるようだが、起き上がれない。

「上条当麻、お前に真相を教えてやる」

「し、真相だと…!?!」

「このままだとオルソラは殺されんだよ。元々、天草式は『法の書』なんて盗んでねエ。そんなもん必要ねエからなア」

「じゃあ、なんでオルソラは天草式から逃げたんだ?」

「建宮に聞いてみなア」

真琴はここで建宮に話を振った。

建宮は静かに笑って答える。

「同じよな」

「同じ?」

「そう。今のお前さんと同じなのよ。自分から助けを求めてきたとはいえ……結局、彼女は最後の最後で我らを信じきる事ができんかったのよ」

上条は黙り込んだ。

「まったく、お門違いも良い所よの。何で我らが『法の書』など求めにゃなんのよ」

「?じゃあ、何のためにオルソラを助けようとしたんだよ」

上条は建宮へと問いかける。

「理由なんてねえのよ」

建宮はそう答えた。

その時、どこか遠くで悲鳴が炸裂した。

「お、る……そら?」

「チツ、行くぞ!」

「……、くそ」

真琴と上条は、勢い良く悲鳴が聞こえた方角へ振り返る。

「なんだそれ、ふざけんなよ」

「慌てるな。今のは別に彼女が死んだって訳じゃねえのよ」

「なに?」

「急げばまだ助かるって意味よ。この際だ、もうお前さんに我ら信じるかどうかなんざ聞きゃしねえのよ。まず先にオルソラの安全を確保する方が重要だ。だからお前さんは我らと敵対したままでも構わんのよ!その代わり約束しろ!必ずオルソラ・アクイナスを口――マ正教から取り戻して、ヤツらの手にも我らの手にも届かん所まで連れて行くと!」

真剣な目だった。

上条は思わずたじろいでしまうほど。

「約束しよう。半分だけなア!」

真琴はそう答えた。

不意に、足音が聞こえてきた。

足音のした方を見ると二人の黒いシスターがやってきた。

「外部協力者の御方ですね。あなた達が捕らえた異端の首謀者の身柄を預かりに参上いたしました。神の敵は……そちらですか?」

「なあ、ちょっと待てよ！」  
上条とシスターのやり取りを真琴は黙って聞いていた。  
しかし、上条が背の高いシスターの肩を掴んだ瞬間、シスターの雰  
囲気が変わった。  
真琴は戦闘体制に入る。

ゴッ！

シスターが担いでいた木製の車輪が、勢い良く爆発した。

「……ッ!？」

真琴は上条に向かう無数の破片を叩き落とす。

「……どういっつもりだア？」

「悲鳴などいちいち変に勘繰ったりしななければこちらの仕事も増え  
ずに済むのに……。くそ、どうして、どうして私がこんな、異教の  
者の、爛れた手で、肩を、肩を、肩を」

背の高いシスターの頭に、音もなく血が上っていく。

くらくらと揺れる顔が、口が、平べったい声を出す。

「まったく次から次へとややこしいですね、本当にもうどうしまし  
よう。その天草式が抵抗し、あなた達を殺めた事にしましょうか。  
ああ、それが一番楽みたいです。その後には私達が天草式の口を封じ  
れば問題にはならないでしょう。シスター・アンジェレネ」

「は、はあい」

背の低いシスターは舌つ足らずに答えると腰のベルトを引き千切っ  
て四つの硬貨袋を頭上へ投げた。

途端、

バサッ！！

と大きな布で空気を叩くような音と共に、袋の口からそれぞれ、ツ  
バメのように鋭い翼が六枚ずつ飛び出した。

それは背の低いシスターが何かを唱え、夜空を迎え入れるように両手を頭上へ差し出した瞬間、

キユガツ!!

と銃弾のような速度で一つが真琴に迫った。

それは真琴に直撃したようだった。

衝撃で真琴の周りには砂煙が舞い、真琴が無事かどうかも分からない。

そこに追撃するかのように、他の三つも放たれた。

「おい！真琴！大丈夫か!？」

上条が叫ぶ。

「…うるせエぞ、上条！」

返事はすぐに返ってきた。

砂煙が晴れると、無傷で同じ場所に立っている真琴がいた。

ただし、その背には一対の翼を生やして…。

「…て、天使!？」

真琴の姿にシスター達は言葉を失った。

その時、遠くから甲高い笛のような音が聞こえてきた。

ヒュイイイイ!!

という鳥の悲鳴のような音色に、シスター達は我にかえる。

「退却命令ですか。シスター・アンジェレネ!!」

「は、はあい!!」

シスター達はきびすを返して暗闇の向こうへと消えていく。

「これで、分かったろうよ」

建宮斎字は夜空を見上げながら、苦虫を噛み潰したような声で、

「あれが、十字教内世界最大宗派・ローマ正教の裏のやり方よ」

第二十六話 九月九日？（前書き）

お久し振りです。

紗袖は生きてますよ。

第二十六話 九月九日？

「なるほどね。道理でアニニューゼ・サンクチイスを見た途端に彼女が茫然自失としていた訳だ。僕達をローマ正教の主力隊から切り離れたのも、始めから見下されていたからかもしれないね。ふん……イギリス清教がいると命令系統が乱れる、か。言ってくれねえ」  
「テーマパーク『パラレルスウィーツパーク』を出た所で、ステイルはのんびり言った。

「てめエが案外、役立たずだからじゃねエの？」

「き、君も言ってくれねえ……」

真琴の毒舌にステイルは顔をしかめた。

「その男の言っている事が全て事実だったとしてもオルソラ・アクイナスはすぐには殺されないだろうね。ヤツらにはヤツらなりの事情がある。……だから上条当麻、今この瞬間にどこかに駆け出そうとするのはやめろ。君が出っ張ると余計にややこしくなる」  
釘を刺された上条は口を尖らせて、

「……、事情って何だよ？」

「ローマ正教は世界最大の宗派なんだよ、とうま。その大人数はオカルトなんて知らないとはいえ、二十億人以上の信徒を抱え、教皇と百四十一人も枢機卿が管理し、百十三ヶ国に教会を持つほど肥大しちゃってるの。大きくなるのは良い事だけど、大きくなりすぎると困った問題が生まれちゃったりもするかも」

「つまりはあれよな。それだけ大きな勢力ならば、当然ながら様々な派閥があるってなもんよ。まずは……」

「…帰る」

突然、真琴が会話を遮り学園都市に向けて歩き始めた。

「お、おい！真琴さん！？」

「…悪リイが、先に帰る」

「ふざけんな！お前はオルソラが……！」

ヒュッ！

上条が止めるにも関わらず、真琴は空間移動で去って行った。

「…アイツ！」

真琴が居なくなっても会話は続けられた。

上条当麻達と別れた真琴は、ある建物の屋根の上に佇んでいた。その建物は、現在ローマ正教のシスター達が集まっている教会だった。

「…例え殺されねエとしてもよ、死ぬより辛い事があんだろ」  
真琴は小さな声で呟いた。

その教会では何かを殴る音と絶叫が聞こえていた。

「…まったく、手間あかけさせちゃあ駄目でしょう？私も含めて皆さん

お忙しいんですよ、残念ながら。あなたの遊びになんざ付き合ってる暇なんてないんです。分かってんなら大人しく処刑を待　おい、聞いてんですか？聞いてんですかーっつってんでしようがよ！こら！！」

どす、という重たい袋を蹴飛ばすような音。

それと共に、この世のものとは思えない絶叫が闇を引き裂いた。

「ハッ！何ですかあその悲鳴。すっかり女捨てちゃって、みっともないとは思わないんですか？まあ、確かに逃げ出したくなんのも分かつちまいますけどね。それにしても随分と頼れるお友達が少なかったみたいじゃないですか。まさか、たまたま現地で出会った天草式なんぞに協力を求めちまうとはね」

アニューゼはオルソラを上から見下していた。

それこそ怪しげな魔道書にでも魅せられたような表情で、がん、ごん、とオルソラのふくらはぎを蹴り続ける。

「死の淵まで追い詰められといて、最後にすがつたのは小汚い国の見知らぬ東洋人どもとはね。騙すのって簡単ですよ。ちよっと手懐ければ後は向こうが獲物を口にくわえて持ってきてくれますから！！」

「…………、だま、された？」

それまで痛みで朦朧としていたオルソラの意識が、ゆっくりと外側へ向いた。

「あの、方達は…………騙、されたので、ござい、ますか…………？あなた、達に…………協力…………したの、では、なく…………騙され、て…………？」

「そんなのどつちでも良いでしょうが。どちらにしても何にしても、あなたはこうして私達に捕まっちゃってんだから。守るべき者をテメエがその手で敵の元へ送り返しちゃあ世話ないってなもんですよ！！」

「…………、」

「ナニ笑ってんですか、あなた」

「そう、ですか。私は今、笑っているのございます、ね」

オルソラはゆつくりと、優しい声で笑った。

「あ？」

その笑いはオルソラへと幸福をもたらした。

「人が笑うつづうんが、そんなにおかしいかア？」

パアン！！

その声はガラスが割れる音と共に、教会へと響き渡った。

「だ、誰だ、貴様！！此処には結界が……」

声へと振り向いたアニューゼは、言葉を失った。

なぜなら……

「……て、天…使？」

そこに八枚の翼を広げた真琴がいたから……。

その姿に他のシスターにも動揺が走った。

「俺だけじゃねエよ！」

その言葉に応えるように……、

バン！！

何かの碎ける音と共に、教会を包んでいた結界が消し飛ばされた。

「こわ、れた……？まさか、おい！あの扉にかけられたアエギディ  
ウスの加護の再確認！」

「あ……」

オルソラは見た。

教会の正面入口、樞でできた大きな両開きの扉が勢い良く開け放たれる。

まるで粗雑な絵本に描かれた王子様がお姫様を助けに来たシーンのように、そこには何者かが立っている。

そこに立っていたのは、ただの少年だった。

そして、少年は一步、オルソラを助け出すために、暗闇に塗り潰された教会へと踏み出した。

上条当麻は、広大な作りかけの教会の中へと踏み込んだ。そんな上条に嘲るような笑い声が聞こえてきた。

上条がそちらを見ると、彼が知らないアニムゼと窓枠の上に真琴がいた。

「そついやあ、おかしいとは思ってたんですがね。魔術師でもないただのド素人が、どうしてゲスト扱いで戦場へ駆り出されていたのか。……理屈は分かりやしません、結界に対して絶対の力を持つ『何か』があると、そついう訳ですか」

「……、」  
「あらまあ、どうしちまったんですか？忘れ物ですか、お駄賃が欲しいとか？あーあー、そこに転がってるモノに未練があんなら裸に剥いちまったも構いやしませんよ」

「一応聞くけどよ。もう、ごまかすつもりもねえんだな？」  
「ごまかす？何を！？この状況見て分かんないんですか？一体どっちが上でどっちが下か。さあ、この人数相手にあなた達がどういう選択を取るべきか、他ならぬあなた達自身の口で言ってもらいますよ」

そついうとアニムゼは挑発するように上条の目の前まで無造作に歩いてきた。

「これが最後のチャンスです。自分達が何をすべきかぐらい分かっちゃってますよね？」

「最後のチャンス。自分達が何をすべきかぐらい分かっちゃまってるか、ね」

まるで、心のどこかで安心したような声で、

「そうだな。確かにこれが最後のチャンスだ。良く分かってるよ。そうだろ、真琴」

ゴッ！！

と上条の右拳が空気を引き裂いた。

ガードごと体を後ろへ弾かれた彼女は狂犬のような目で上条を睨みつける。

ザンツ！！

と羽根が舞い降りた。

オルソラ以外のシスターに、弾丸のように降り注ぎ掠めるだけに留まった。

シスター達は真琴を睨みつける。

一秒すらためらわず。

一瞬すら迷いを見せずに、その少年達は己の覚悟を目の前の敵へ見せつけた。

「き、サマ、ら。何の真似だ、これはアアアアアアツ！！」  
怒れるアニニューゼに上条と真琴はそれ以上の怒号を突きつける。

「何をすべきか、だと？なめやがって「助けるに決まってる（ン）だろが！！」」

同じ『怒り』であるはずなのに、質も温度も全く異なるものだった。  
「おも、しろい、ですよ。あなた、たち」

アニニューゼは、ぶるぶると声と体を震わせて、

「二百人以上を相手に、この状況で、あなた達二人に何がどこまでできるのか！見せてもらおうとしましょうか！ははっ、この数の差なら六十秒で挽肉になっちまうと思いますけどね！」

その声を合図に、黒いシスター達は各々の武器を構える。

そんな中、唐突に、何者かの声が飛んできた。

「まったく、勝手に始めないで欲しいね。せつかく結界の穴から上手く侵入できたというのに。せめて十分にルーンを配置する時間ぐらいは用意させておいてもらいたかったんだけど」

「は………?」

アニューゼが呆けたような顔で振り返った瞬間、

轟! !

と炎が酸素を吸い込む音と共に、暗闇がオレンジ色の爆発によって一気に薙ぎ払われた。

「……す、ている?」

「…帰れロリコン」

「き、君ねえ…、僕のどこがロリコンだ! ?」

「…存在全て」

真琴に存在そのものをロリコン扱いされたステイルは、その場で膝をついた。

「イギ、リス清教? 馬鹿な……これはローマ正教内だけの問題なんですよ! あなたが関わるといふなら、それは内政干渉とみなされちまうのが分かんないんですか! ?」

「ああ、残念ながらそれは適応されない」

「オルソラの胸を見る。そこにイギリス清教の十字架がかけられているのが分かるな? 今のオルソラはローマ正教ではなく、僕達イギリス清教のメンバーであるという訳さ」

「チイツ! 二人が三人に増えたところで、何が……! ?」

彼女は憎々しげな声をあげたが、やはりそれも別の人間の声によって遮られる。

「三人で済むとか思ってたんじゃないのよ」

「!?!」

今度は壁が爆弾で吹き飛ばされたように砕け散った。

「建宮……」

「帰れ負け犬」

「負け犬とは聞き捨てならんよ」

「負け犬は事実だろ」

その言葉に建宮は目に見えてやる気を無くしたようだ。

建宮の後ろにいた天草式の面々が慰めている。

「まったく、だから決着は誰かが着けるから、とうまは気にしないで良いよって言ったのに」

「いん、でつくす……」

「……テメエが一番邪魔だ。さっさと帰れ、足手まとい」

「う、うう……」

白い少女が泣き出した。

「……味方の戦意を落としてどうするんだ!?!」「そんなもん知るかア」

ステイルが真琴を咎めるが、真琴は全く気にも留めない。

そんな彼らの姿を見て、アニニューゼは爆発した。

「殺せ」

というただ一言の命令の下、闇に染まる数百ものシスター達が跳ねるように襲いかかった。

…最後の戦いが、不条理なお話に決着を着けるために集まった者達の、最後の戦いが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6629/>

---

【Unilaterally Electron Child】

2011年7月30日00時05分発行